

文部科学省 平成 30 年度「大学の世界展開力強化事業
～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」選定事業
「日米をつなぐ NU⁴-COIL² ～地域に根ざしたテイラーメイド型教育プログラム～」

MEXT Inter-University Exchange Project (Adopted Year AY2018)

“Connecting Japan and the U.S. through NU⁴-COIL² :
A Regionally Deep-rooted Tailor-made Education Program”



総括報告書

(2018-2022 年度)

Concluding Report (AY2018-2022)

南山大学

Nanzan University

目次 Contents

I. はじめに

- 南山大学グローバル化戦略におけるキードライバーとしてのNU-COILプログラム 1
南山大学副学長（グローバル化推進担当） 星野 昌裕

II. 事業概要・成果報告および今後の展望

- 本事業5年間の成果概要 3
南山大学国際センター特別任用講師 藤掛 千絵

III. COIL型教育の意義・成果、今後の展開

- Promoting Peer Learning and Student Engagement through COIL 8
南山大学外国語教育センター教授 John HOWREY
- Reflections on NU-COIL Basic COIL Partnerships 2019-2022 10
南山大学経営学部経営学科准教授 Thomas E. BIERI
- University of Maryland, Baltimore County とのアカデミック COIL を振り返る 12
南山大学外国語学部英米学科教授 花木 亨
- アカデミック COIL の大きな意義 13
南山大学外国語学部アジア学科准教授 宮原 佳昭
- 授業手法のパラダイム・シフト 14
南山大学国際教養学部国際教養学科教授 鹿野 緑
- 国際産官学連携 PBL C がもたらした価値とは 15
南山大学国際センター特別任用講師 山田 貴将
- SDGs をテーマに社会課題の解決を目指した製品・サービスを提案する
PBL COIL 授業デザインと実践について 18
南山大学国際センター特別任用講師 小野 詩紀子

IV. 米国連携校との取り組み事例

- 上級日本語クラスにおける国際協働学習の効果 —産官学連携 PBL COIL の実践を通して— 21
Arizona State University, School of International Letters and Cultures,
Teaching Professor in Japanese 下村 朋子
- COIL 教育の効果 学生からのフィードバックより 23
Dickinson College, Senior Lecturer of Japanese 目黒 秋子
- 南山ジョージタウン COIL プロジェクト 25
Georgetown University, Director of the Japanese Language Program 森 美子

COIL Report and Reflections	28
Northern Kentucky University, School of Media and Communication, Professor 桑原 泰枝		
クイーンズ大学における COIL Project の拡大化への取り組み	30
Queens College, the City University of New York, Director of Japanese Studies		
		藤本 まり
COIL による異文化交流と気づき	32
University of Maryland, Baltimore County, Senior Lecturer・Japanese Area Coordinator		
		フーゲンブーム 智子
UNG での COIL の取り組み	33
University of North Georgia, Department of Modern and Classical Languages,		
		Associate Professor 西尾 知恵

V. 学生による学びの報告

留学経験とキャリア形成	35
南山大学外国語学部英米学科 4 年 市村 朋也		
学内での国際交流から学んだこと	38
南山大学外国語学部英米学科 3 年 堀町 莉音		
COIL と私の留学経験について	42
南山大学外国語学部英米学科 3 年 佐藤 佑衣		
My Experience with the COIL Program at Nanzan University	45
University of North Georgia, Junior, Department of East Asian Studies Alexander HOWELL		
My COIL Experience	48
Arizona State University, Bachelor's degree in Japanese Sage DRUCH		

VI. 総括シンポジウム

プログラム	50
-------	-------	----

VII. 総括

国際教育のさらなる進化に向けて	53
南山大学国際センター長 山岸 敬和		

I. はじめに

南山大学グローバル化戦略におけるキードライバーとしてのNU-COILプログラム

南山大学副学長（グローバル化推進担当）

星野 昌裕

「日米をつなぐ NU⁴-COIL² ～地域に根ざしたテイラーメイド型教育プログラム～」は、2018 年度に 5 年間の計画で公募された文部科学省「大学の世界展開力強化事業-COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援」において採択された本学のプログラムである。本学、東京大学、上智大学、関西大学、琉球大学など全国 10 大学の事業が採択され、東海・北陸地区で唯一の採択校であった本学では、これを NU-COIL(Nanzan University COIL)プログラムと呼び、グローバル化戦略におけるキードライバーに位置づけて運営してきた。

南山大学は建学の理念を「キリスト教世界観に基づく学校教育」、教育モットーを「Hominis Dignitati（人間の尊厳のために）」としている。これをもとに 2007 年に 20 年後の将来像を見据えたグランドデザインを策定し、2015 年には「南山大学国際化ビジョン」を定めている。「国際化ビジョン」では 3 つのキーワードを掲げ、1 つめのキーワードである「学生の多様性と流動性の確保」に関連して、2017 年度には全学一斉にクォーター制を導入し、例えば 6 月から 7 月の第 2 クォーターにあわせて米国の大学から短期留学生を受け入れることが可能になるなど、本事業開始前から「学生の多様性と流動性」を確保するための制度を構築してきた。2 つめは「グローバル化に対応した環境整備」であり、とくに留学を補完する教育の場として ICT を用いた交流の促進によって「国境のない学びの場」の実現を掲げていたことは、COIL 型授業を導入した今日から振り返るなら、まさに時代を先取る鋭い先見性を示していたといえよう。3 つめは「国内外における企業等との連携ならびにネットワークの拡充」であり、中部圏にあるグローバル企業等と連携して PBL (Project-Based Learning) を推進することが目指されていた。

本学では、「国際化ビジョン」の 3 つのキーワードと、1974 年にネブラスカ大学リンカーン校との協定締結を皮切りに半世紀にわたって積み上げてきたアメリカとの研究・学生交流の実績を土台に本事業を推進し、「多文化共生力」、「学際的国際力」、「問題発見・解決力」の 3 つの力を兼ね備えた「Career Oriented Interactive Leadership」能力を持つ人材育成を目標に、COIL 型教育を活用した多層的なプログラムを運営してきた。事業名に掲げた「COIL²」とは、養成する人材像の頭文字を、教育メソッドである COIL にあわせ、手段と目標の関係をわかりやすく表現した本学独自の呼称である。また「NU⁴」とは、本学(Nanzan University)の取り組みを米国との関係(Nanzan-United States)にとどまらず、ニッポン国内他大学とアメリカ(Nippon-United States)、またアメリカから世界各国、ユニバーサル(Nippon-Universal)へ広げていくことを目指し、そのロードマップを頭文字の NU であわせた表現である。2018 年度から 2022 年度までの事業期間中、2020 年度以降は新型コロナウイルスの影響で実渡航が制限されるなど多くの困難に直面したが、一方で、教職員と学生のオンラインに関するリテラシーが一気に向上したことで COIL 型教育の潜在力が開花し、多様なバックグラウンドを有する国境を越えた学生同士のディスカッションを促進するプラットフォームへと発展させることができた。危機をチャンスにかえたことで、本報告書のなかで詳細に語られるように、「COIL²」と「NU⁴」の双方ともに当初の目標を大きく上回る成果をあげることができた。

本事業においては、COIL 型授業の導入だけでなく、将来の関係を見据えた日本と米国間の連携強化に資する目標を定めていたことも忘れてはいけないだろう。本事業が構想された頃、日米関係の重要性にも

かかわらず、日米間の学生モビリティが期待したほどの伸びを示していないことがよく指摘されていた。本事業に参加する学生たちに、日米関係の重要性を再認識してもらうには、地元愛知県の特徴に応じて課題を設定するテイラーメイド型アプローチが有効であると考え、「地域に根ざす」という教育プログラムを重要視してきた。米国側 8 連携大学が地元愛知県と経済や文化面で深いつながりのある地域に所在するのも特色となっている。本事業の実績をみると、新型コロナウイルスの影響を受けながらも、最終的には学生モビリティを着実に高めることができおり、短期留学、長期留学、そして COIL 型授業に参加した学生のフィードバックをみても、本事業が学生の相互理解に大きな効果を発揮したことがわかる。本事業に参加した日米双方の学生たちが日米間の架け橋となる人材になるよう、今後とも支援を継続していきたい。

私自身が COIL 型教育を実践するなかで気づいたことは、COIL 型教育が、研究者として培ってきた国際的ネットワークを、教育者として授業の現場に引き込む教育手法ということだった。それは、自らの教育手法や評価基準を世界的なフレームワークのなかで相対化し検証することにつながるものといえる。従来の国際化が学生モビリティの拡充に重点が置かれていたとすれば、本事業で導入した COIL 型教育を継続していくには、教員自らが自身の研究テーマに即したグローバルネットワークを絶えず維持、拡大していくことが必要で、学生のみならず教員自身も国際化と向き合っていくことが求められる。

本学のロバート・キサラ学長は「地球規模の関心 私たちの貢献」をキーフレーズに掲げている。それは、世界に視野を広げ自分特有の貢献を見つけてほしいというメッセージである。国際問題と直にふれあうことで自らの視野を世界規模に広げられる NU-COIL は、「地球規模の関心 私たちの貢献」を実現していくための極めて有力なプラットフォームである。「大学の世界展開力強化事業」としての取組みは 2022 年度で終了するが、NU-COIL は本学のグローバル化戦略におけるキードライバーとして、引き続き大きな役割を担っていかなくてはならない。

5 年間のプロジェクトを終えるにあたり、連携企業、団体、官公庁、米国連携校のみならず、また本事業に関心を持って積極的に参加してくれた学生に心からの感謝を伝えたい。また、本事業が当初の目標を達成できたのは、表舞台にでることを控えながらも情熱を燃やして本事業に関わってくれた事務職員のみならずのおかげである。この場を借りて御礼を申し上げるとともに、来年度以降の NU-COIL のさらなる発展のためにも挑戦をしていきたいと考える。



連携企業、団体、官公庁、米国連携校のみならずとの集合写真（2022 年 12 月 21 日 NU-COIL シンポジウム）



米国連携校のみならずと登壇学生との集合写真（2022 年 12 月 21 日 NU-COIL シンポジウム）

II. 事業概要・成果報告および今後の展望

本事業5年間の成果概要

南山大学国際センター特別任用講師

藤掛 千絵

【事業概要】

本学は「キリスト教世界観に基づく学校教育」を建学の理念とし、1946年の建学以来、外国語教育と国際教育を重視してきた。全協定校の中でも、米国の協定校は42校で最も多く、本事業開始以前にも交換留学が盛んに行われてきた。本事業は、その実績をもとに、日米双方向型のCOIL型授業を通じて、人的ネットワークの形成・拡大・活性化を促し、日米間のみならず世界が直面している問題を能動的に解決できる人材の育成を目的としてきた。その目的のためにCOIL型授業と留学プログラムやインターンシップとを連動させ、地域に根ざしたテイラーメイド型の以下3つのプログラムを展開してきた。

①短期留学（派遣・受入）とベーシックCOILの連動プログラム

ベーシックCOIL科目は、オンライン上での文化交流や簡単な意見交換を行うものである。これを受講したうえで短期留学（派遣・受入）に参加することで、COIL型授業で交流を深めた両国の学生が、相互受入の際にバディとなって生活支援や学修支援を行い、COIL型授業と海外留学との有機的な教育連携効果を生み出していった。COIL型授業と短期留学（派遣・受入）の連動は、相手大学や相手国に対する親近感を向上させ、長期留学への重要な足がかりと日米文化交流の入り口的役割を果たした。

②長期留学（派遣・受入）とアカデミックCOILの連動プログラム

アカデミックCOIL科目は、日米間の政治、経済、文化などの専門科目をCOIL型授業で学習するもので、学生たちは、これを受講した上で、協定校への長期留学（派遣・受入）に参加した。専門分野に関するアカデミックCOIL科目を留学前に受けることで、留学先で専門科目を受講する際の言語と研究両面で乗り越えなければならないハードルを低くすると同時に、文化背景の違う者同士の共同作業に必要なコミュニケーションスキルや心構えを修得した。

③地元愛知県の産官学連携によるインターンシップとPBL COILの連動プログラム

PBL COIL (Project Based Learning COIL) 科目は、長期留学後の実践的なCOIL型授業に位置づけられた。本学が立地する愛知県は製造業が盛んで、米国とは経済や文化の面で密接に関わる地域であることから、同県に所在する企業、団体、官公庁から日米に関わるビジネス・行政上の課題を提供してもらった。その課題に対して、日米の学生がCOIL型授業を通じてリサーチや解決策を議論してアイデアを提案し、課題の提供先からフィードバックを受けた。あわせて、課題を提供する企業、団体、官公庁でインターンシップを行い、実際のビジネスや業務の現場により近い立ち位置で課題を理解した。

以上の3つのプログラムを通して、参加学生が備えるべき資質を以下のように定めた。

- ①【多文化共生力】現代の日米関係の表層的な部分だけでなく、日米の歴史的背景や宗教観を含む文化的背景を十分に理解している
- ②【学際的国際力】様々な学問分野から国・地域を超えて発生するグローバルな問題を複眼的に理解し、議論できる
- ③【問題発見・解決力】多文化共生力・学際的国際力を用いながら、異なる文化背景を持つ人々と協働して問題の所在を発見しそれを解決できる

【COIL を活用した短期留学プログラム】

事業初年度に「NU-COIL 短期留学プログラム（ノースジョージア大学）」を新設した。これは、留学前に、受け入れ先の米国大学の学生たちと COIL の手法を用いた協働学修に取り組み、その後に本学の学生が渡米し 2 週間の現地研修に参加するものであった。COIL 型授業との連動プログラムとしてのモデルを初年度で確立したことにより、他学部他学科における海外研修でその手法が応用され、学内に展開された。特に 2019 年度末以降のコロナ禍においては、NU-COIL 短期留学プログラムの現地研修もオンライン化し、その実践が他学部他学科における実践のモデルとなった（外国語学部、国際教養学部、理工学部）。その後、COIL の手法を併せた短期研修の形が着実に学内で根付いている。

ノースジョージア大学の短期留学プログラムにおいては、事前の 5～6 週間の協働学修と現地研修 2 週間（2019～2021 年度は現地研修をオンライン化）を実施し、多文化共生力を養うという観点から、日米の学生が互いの文化や風習を理解することと、基本的な語学力向上を目的とした。具体的には、互いの大学の違いを様々な観点から比較し意見交換をする中で理解を深め、そして意見交換においては週ごとに英語と日本語を交互に使用することで双方の言語能力向上を実現させた。具体的な成果物としては、2 週間の現地研修中に日米の学生グループで制作するビデオだが、コロナ禍におけるオンライン化に際しては、オンライン形式であっても活発な交流を促すために、スピーチ発表をするスピーチプロジェクトを追加した。それは、2022 年度に現地研修が再開されても継続され、学生たちのプレゼンテーション力や思考力、それに伴う言語力向上にもつながった。

【長期派遣（交換留学）】

学生たちは、事前の COIL 型授業などで交流や協働学修をした海外学生と現地で対面し、生活面や学修面でのサポートを得ながら友好関係を築き勉学に安心して励むことが出来た。2018、2019 年度の 2 年間においては計画数を大幅に上回る実渡航を伴った交流学生数（派遣目標人数 15 名に対し 20 名、受入目標人数 14 名に対し 24 名）を達成した。2020、2021 年度においてはコロナ禍の影響を受けたが、実渡航を伴う留学については、2021 年度には 12 名を派遣（目標 17 名）した。コロナ禍においてもオンラインでの国際交流の機会や、COIL 型授業の拡充に努め、渡航が困難な時期においても留学や国際交流に対する学生の関心を高めていき、最終年度においては派遣 19 名、受入 30 名となり、目標数（派遣 17 名、受入 16 名）を上回った。長期留学前にアカデミック COIL 科目の履修を義務づけたことで、学生たちは留学前に、国の政策や社会問題などについてグローバルな視点から意見交換する機会を得て、留学先での学修に対して高いモチベーションと目標を抱くことができ、長期留学に対する目的意識を高めることができた。事業開始以来、様々な学部学科へと広がりを見せたアカデミック COIL 科目は、他学部ゼミ同士の連携も実現し、そこに海外の学生も参加することで、学際性・国際性に富んだ取り組みとなった。ひとつの社会問題を海外の学生と議論し、普段のクラスのディスカッションやグループ活動では得られにくい異なる見方や考え方を知る機会となったことで、学際的国際力を学生たちが身につけ、さらなる探求心を養うことができた。

【産官学連携によるインターンシップと国際産官学連携 PBL 科目 (PBL COIL) の連動】

①インターンシップ：NU-COIL 短期留学プログラム（ノースジョージア大学）の派遣学生と長期派遣学生には、留学先周辺にある連携企業への訪問型インターンシップの機会を提供した。具体的には、2018 年

度から最終年度にかけて、御菓子所松河屋老舗、マキタ・コーポレーション・オブ・アメリカ、東京新聞/中日新聞アメリカ総局・ニューヨーク支局、Downtown Phoenix Inc.、DMG MORI Chicago、トヨタ紡織アメリカなど多くの企業から協力を得て、学生たちは日米比較という観点でビジネスの現場を目にし、将来の自分のキャリア形成について改めて深く考える貴重な機会となった。受入学生に対しても、愛知県庁や御菓子所松河屋老舗への訪問型インターンシップの機会を提供し、学生たちは日本のものづくりやビジネス、行政の現場に触れて、担当者から直にヒアリングをすることで理解を深めた。

②**国際産官学連携 PBL 科目 (PBL COIL)**：本授業は連携企業・官公庁関係者のニーズを組み入れたテイラーメイド型の連携プロジェクトである。2019年度に3科目開講させて始まったPBL COIL科目は、最終年度には5科目を開講させ、5年間で連携した企業・団体数は15にのぼった。産官学協議会の定期開催も経て事業終了後においても継続的に関係性を深めていける基盤を築くことができた。テイラーメイド型の特性を生かし、プロジェクトのテーマも多様性を帯び、異文化理解から社会福祉、そして環境問題、未来の車や移動手段、インクルーシブな街づくりなどについて学生たちが議論をした。様々な学部学科に所属する学生たちの興味関心を引き付け、互いの専門性を持ち寄って問題解決に取り組むことができ、さらに海外の学生と共に社会問題について議論をすることでアカデミック COIL 科目と長期留学の経験から身につけた学際的国際力を存分に発揮できる機会となった。学生の最終成果報告に対しては、企業・団体の担当者から「問題解決につながる優れた提案である」と高い評価を得た。日米の学生たちは問題発見・解決力だけでなく、グループワークにおける調整の必要性や成果物を精度の高いものに仕上げるための意思決定プロセスを経験し、連携企業からは、社会人として必要な能力を伸ばすための貴重な取組みであることを評価された。

【外部評価者による評価・点検】

本事業を外部有識者に評価していただくことを目的に NU-COIL 外部評価会議を設置した。評価者は国際教育を専門とする大学教授、米国との国際交流を実施する団体関係者、日米関係に精通する地元メディア関係者、在日米国領事館関係者の4名構成とした。毎年度開催し、外部評価者からは授業課題の評価方法やルーブリックの運用などについて示唆や助言が提示され、本事業の質を保証する上での重要な知見を得ることができた。具体的には、PBL COIL 科目を中心とした質保証の伴った事業展開や、米国以外の地域を含めた COIL 型教育の展開、将来を見越した新たな交流先の開拓など、戦略的な事業の推進について高い評価を受けた。また、学生の声や感想などを積極的にヒアリングし、またそれと共に活動の様子などを広く外部に発信することで、学生主体の学びとしての教育交流が実現されていることがわかる好事例であるとも評価を受けた。

今後の継続的な課題としては、米国とのパートナーを軸とした第三国・機関を含めた交流の発展や、ルーブリックを用いた評価検証のモデル化、そして学生交流だけでなく教職員の交流の更なる推進など、国際化の新たなアプローチの検討が挙げられ、将来の自走化に向けて有意義な議論を交わす場となった。

【大学・地域の国際化と今後の展望】

本事業はコロナ禍を含めた5年間を経て、構想調書の計画の達成を目指すと共に、オンラインを活用した国際交流・異文化理解を促す取組みを発展させ、学生の新たなニーズに応じてきた。米国大学や世界各国の大学との連携強化や産業界とのネットワーク拡大とともに、COIL の手法を取り入れた授業や留学

プログラム、企業などと連携した取組が大学全体に定着し、大学の更なる国際化や産官学連携促進を実現した。本事業を通じて多文化共生力、学際的国際力、問題発見・解決力を備えたグローバル人材を養成するため、正課外の国際交流活動から、COIL 型授業の履修、留学、インターンシップ、そして PBL COIL 科目の履修という、多種多様な機会を学生に提供し、グローバル人材養成のためのプラットフォームを着実に築いてきた。さらには、それに携わる学生アシスタントを雇用し、PBL COIL 科目の専任アシスタントや受入学生のためのランゲージバディなどが活躍してきた。またヤンセン国際寮における学生のレジデント・リーダーとしての活動も開始し、学内の国際教育に能動的に関わる学生が増えたことで、受け身ではない「内なる国際化」を促進させた。さらに、国内他大学への情報発信やシンポジウム等の講演などを通してのノウハウの提供、事業立ち上げに関わる助言、授業連携機会の提供、近隣他大学の学生への国際交流機会の提供などを通して、学外や地域の国際化にも貢献することができた。

米国 8 連携校とは定期開催の協議会やカンファレンス等での共同発表、日米学生合同の企業訪問なども経て、コロナ禍においても連携体制を強化することができ、事業終了後も継続して発展的な国際交流の形を実現していく方針で合意をしている。また本事業をきっかけに、COIL 型教育を実施することで合意した新たな交流協定を結んだ大学もあり、今後さらに他国・地域においても交流を拡大させていく計画である。さらに、近隣他大学への横展開や、地元企業・団体との連携拡大をすることで地域に開けた教育を展開しつつ、連携体制の下における教育の質保証について今後もさらに検討し質の向上に努めていきたい。



ネットワーキングイベントの様子



オンライン短期留学プログラムにて
バーチャルキャンパスツアーを行う様子



インターンシップ

Downtown Phoenix Inc. 訪問



インターンシップ

御菓子所松河屋老舗 訪問

【交流学生数】目標(5年間)：派遣 442 人、受入 153 人

累計実績(オンライン交流含む)：派遣総数 593 人、受入総数 312 人

		2018 年度	2019 年度	2020 年度		2021 年度		2022 年度	
		実渡航	実渡航	実渡航	オンライン (※2)	実渡航	オンライン (※2)	実渡航	オンライン
派 遣	長期	8	12	-	1	12	-	19	-
	短期 (※1)	10	92	-	14	-	383	18	24
受 入	長期	9	15	-	4	-	4	30	-
	短期	0	16	-	-	-	234	-	0

(※1) 事業初年度は単位取得を伴わないプログラムとして実施(2019年度に科目開設)

(※2) 文部科学省による「フォローアップ調査」のカウント方針に準じる

【COIL 型授業受講者数と科目数】(括弧内の数値は目標値)

	2018 年度	2019 年度	2020 年度	2021 年度	2022 年度 (※1)	累計実績
本事業における COIL 型教育 手法を活用した授業科目数	2(1)	25(13)	18(17)	28(21)	25(24)	98(76)
大学全体の COIL 型教育手法 を活用した授業科目数	5(3)	38(17)	38(30)	53(38)	49(48)	183(136)
本事業における COIL 型教育 の受講者数(日本人学生)	90(20)	410(260)	294(340)	605(420)	407(480)	1806(1520)
本事業における COIL 型教育 の受講者数(外国人学生)	50(15)	475(195)	353(255)	480(315)	380(360)	1738(1140)

(※1) 2023 年 3 月上旬の実績見込み数

Ⅲ. COIL 型教育の意義・成果、今後の展開

Promoting Peer Learning and Student Engagement through COIL

Nanzan University
Foreign Language Education Center
Senior Language Instructor
John HOWREY

In the past four years, I've been lucky enough to have been involved with COIL at Nanzan University, partnering with instructors at other institutions in the United States and Taiwan for one or more academic quarters. In these COIL programs, students met online to exchange opinions and experiences and collaborate on projects. The goals of a Basic COIL program are to promote peer-to-peer learning, cultural exchange, and the development of foreign language skills. Ideally, involvement in COIL programs will help students prepare for short-term study abroad. In 2022, I was involved with two Basic COIL collaborations, one of which I will describe here.

From June 14 to July 19, I partnered with Tomoe Nishio at the University of North Georgia (UNG). Nishio was teaching Japanese Sociolinguistics as a six-week summer course for second-year students and above. Since it was a more advanced course, only six students were enrolled. These students had already taken one or more years of Japanese language courses. I was teaching the second quarter of English Literacy, a required reading and writing course for first-year students in the Department of British and American Studies with 22 students. Students in this department study abroad in the second year, most of them going to the United States. Our collaboration focused on having our students help one another as a primary resource so that students could write an essay.

NU and UNG students met synchronously four times and in small groups twice more outside of class. We used ZOOM for class and group meetings, the LMS Canvas for posting instruction videos, readings, and file submission of assignments, grading, and updates, and the SNS app LINE to post class reminders and organize the outside-of-class group meetings. Because of the time zone difference and fewer UNG students, the four synchronous class sessions were held during the regularly scheduled Literacy course class time, so students met from 9:20 am to 10:50 am, Japanese time, which was from 19:20 to 20:50 in the US. The sessions were conducted only in English.

In the first ZOOM session, the instructors explained the project, assigned students to groups, and put students in breakout rooms to introduce themselves. Each group had one UNG student and 3 or 4 NU students. In both classes, students had to write an essay using primary research from their peers. The UNG students had to write an essay about Japanese dialects. To accomplish this, students watched videos about dialects linked on Canvas and the NU students researched a Japanese dialect and wrote a description paper about it to share with UNG students. This paper's outline and first draft were first checked by the instructor. In the second ZOOM session, NU students explained the dialect they researched, and the UNG students asked follow-up questions. NU students met their group outside of class for a peer review of their essays and submitted the final draft to the instructor. This description paper of a dialect was a part of the Literacy course evaluation but was not the final essay they wrote for the COIL project. It was assigned so that the NU students would be better prepared to discuss Japanese dialects with their UNG counterparts. The UNG students continued to work on their COIL essays.

For the third ZOOM session, NU students prepared a list of questions about US culture which was checked

by their instructor. They used the answers to these questions to write their COIL essay, a comparison of Japanese and US culture to prepare them for study abroad the following year. To help with this, students were given readings describing ways that cultures are often classified. Students then asked their questions in breakout rooms and collected primary research for their papers. Students changed groups once so that NU students could get answers from at least two different UNG students. Students then wrote a rough draft that was checked by the instructor and revised it. Students then met outside of class in groups on ZOOM for a feedback session where UNG students offered feedback on the drafts, and NU students asked additional questions. Finally, students in both classes submitted the final drafts. In the fourth and final ZOOM session, students shared their experiences collaborating on the project in breakout rooms and one representative from each group summarized their reflections with the whole class.

In terms of assessment, the COIL project was worth 30% of the course grade. 10% of the grade was based on preparation for the ZOOM sessions, attendance on ZOOM, the rough draft of their essay, and their reflections for each ZOOM session. 20% of the grade was based on the final draft of the COIL essay.

This COIL project was a success from multiple perspectives. Active learning took place during the synchronous and asynchronous ZOOM sessions. The NU students could develop language skills since the sessions were all in English, and both groups gained a better understanding of cross-cultural communication as well as learned information related to their paper topics. Most importantly, student motivation and engagement were high. Students were excited about meeting their partners, sharing what they learned, and acquiring new information from peers. While students had to meet twice outside of class on ZOOM, the reality was that most groups met three or more times on ZOOM and had follow-up discussion chats on LINE. Students were exposed to not only much more up-to-date real-world information but also a greater variety of information since they collected primary research from two or more students from people their own age who often had different life experiences.

Obviously, when assigning a group or collaborative project, there are going to be some logistic challenges. This is even more true when doing everything online. Fortunately, because students were so engaged in the project and the essays and much of the coursework were a part of the regular courses we taught anyway, we did not have any rogue students who disappeared halfway through the project. Students were also familiar with ZOOM and online learning because many of their classes were conducted online due to the unfortunate pandemic.

Working with another instructor was also beneficial. Nishio was more experienced using the Canvas LMS and created transparent criteria for each assignment, something which I incorporate into my other classes, too. The COIL projects have also been a golden opportunity to better learn how to use online tools more effectively and learn how other institutions approach key educational issues such as student privacy and ethics in research as well as gain more experience with collaboration in general.

I can honestly say that the COIL project is the best part of my literacy course, not just for the quarter it was held, but for the academic year. Students are much more engaged and, as a result, learn so much more than what they might learn from lectures or textbook readings. They get to practice and further develop not only language skills but also real-life skills in a more relaxed, non-threatening environment and undoubtedly walk away with treasured memories and even lasting friendships. The technology to make these collaborations possible is fairly easy to manage, particularly now that most instructors have experience teaching online.

Reflections on NU-COIL Basic COIL Partnerships 2019-2022

Nanzan University
Department of Business Administration
Associate Professor • Coordinator, Business English Program
Thomas E. BIERI

In this report I describe the process and evolution of the ongoing virtual exchanges within the NU-COIL framework between Business English classes in Nanzan University's Department of Business Administration and Japanese classes in Dickinson College's Department of East Asian Studies. I discuss the purposes, modes of implementation, and effects of these educational partnerships, as well as touch on future plans and perceived potential of these types of courses.

Background

Prior to the start of the NU-COIL program, I had seen conference presentations on text-based virtual exchanges using social media platforms such as Twitter and Facebook and synchronous conversation exchanges on Skype. Also, I knew of some colleagues doing them with their own classes. While these activities seemed of some value, I had never been able to arrange any in my own courses. Therefore, when the NU-COIL staff visited me to explain the budding program here at Nanzan University and invite me to participate, I was happy and excited to do so. The staff discussed with me which of my courses I thought they might be suitable in and the types of exchanges, and they then suggested potential partners in the USA with similar parameters. I was able to meet Dickinson College professors Alex Bates and Akiko Meguro in person in early 2019 and discuss general ideas and ultimately agree to arrange for exchanges in Fall of 2019 between each of the sections of our Business English Program classes and a combination of their Japanese Language courses.

Purposes and assessments

Professor Meguro became my direct contact for planning these sessions, and already had experience in virtual exchanges prior to ours. Her experience and guidance proved critical in allowing our partnership to both start smoothly and flourish. We agreed that since we had different educational objectives in our respective syllabi, building English language skills vs. building Japanese language skills, that we would focus on conversational and cultural exchange in each language, with our own students having their own assignments and assessments. Our common goals have been to have students learn a bit about individual students in each other's institution, to learn about some aspects of student life in each other's institution as well as a bit about the local area, and to practice using the respective language structures and vocabulary being learned our courses with native or native-like speakers. Assessments for my courses in particular have focused on written reports about what they've learned from their partners, including specific information from semi-structured interviews, and for the final course of the academic year they use some of the gathered information to inform and justify choices for an international franchise plan which they present to the class as a final project.

Implementation

In each academic year since 2019, we have conducted a total of between three and five sessions of about

one hour each, and each term we have also coordinated the simultaneous participation of other instructors and their courses within our respective programs. While in the first year we experimented with having students contact assigned partners directly via email and then set up their own meeting times, we found this problematic in several ways. My students in particular were not familiar with using email in general nor email in English, replies were not always timely, and the different time zones meant that finding an acceptable meeting time was often difficult. From that point on we met during the scheduled class time for one or the other of our courses, starting with Skype and then changing to Zoom once it became widely used due to the shift to emergency remote teaching (ERT) early in the COVID-19 pandemic. Each of us used class time in advance to prepare our students to talk about certain topics and practice specific language skills during the actual sessions. In the sessions we put pairs or small groups into breakout rooms where they spend half the time conversing in English and half in Japanese, and we were available for troubleshooting. We've also allowed for exchange of contact information and ongoing communication on a voluntary basis.

Effects

Between conducting surveys, having discussions with my students, and reading comments in their reports, I feel comfortable asserting that the students in the Business English program have generally found the exchange sessions interesting, informative, and motivating for their language study both in preparation and afterwards to overcome weaknesses they noticed during the sessions. Using English as a tool to communicate with peers overseas was more engaging than normal classroom study, while learning about other cultural practices and sharing their own seemed to build more intercultural awareness and more curiosity to learn more. Some students commented on being more interested in doing overseas studies in general, and some in wanting to study at Dickinson College in particular.

For myself, I found it valuable to work with a more experienced partner and learn from her experience initially, and then to have someone to compare new ideas with as we both continued to evolve our skills and aims. Having started these sessions prior to the aforementioned shift to ERT, I had the unexpected benefit of having already gained some experience and comfort teaching with technologies that many others were struggling to learn to use. Thanks to my academic partnership with Professor Meguro, I also had the unexpected benefit on a personal level of her being a source of very helpful and critical information during the pandemic regarding travel restrictions and options when I was needing to arrange travel to the USA to attend to a family crisis and then back to Japan.

Future

While the MEXT-supported NU-COIL project is coming to the end of the five-year term, Professor Meguro and I are already planning for continued exchanges in 2023. We both hope to find a way in which we can expand the interactions beyond the current synchronous sessions to include more ongoing communication, whether synchronous or asynchronous, between small groups and perhaps involve collaboration on small projects. While we are still considering the specific details, we expect to continue to evolve our collaborations in the coming years. I expect that these will continue to provide students with growth in linguistic and intercultural competencies, and hope that they will also be a complement to more cross-border student mobility.

2019年度から2022年度までの4年間にわたって、毎年1回、アカデミック COIL プロジェクトを実施した。2019年度は「メディアとコミュニケーション／メディア論」、2020年度から2022年度までは「異文化コミュニケーション」の授業の一環として、これを実施した。パートナーは University of Maryland, Baltimore County の Tomoko Hoogenboom 先生で、彼女が担当する日本語、日本文化、日本映画などについての授業と連携した。Hoogenboom 先生の授業では、すべての受講者が COIL プロジェクトに参加した一方で、私の授業では、150名ほどの受講者の中から希望者を募り、授業時間外に COIL プロジェクトに参加してもらった。UMBC の参加学生数は、少ない年で22名、多い年で27名、南山大学の参加学生数は、少ない年で13名、多い年で27名だった。

活動内容は毎年ほぼ同じで、日米の学生たちを混ぜ合わせて3名から4名ほどのグループを作り、グループごとに課題に取り組んでもらうというものだった。課題は、一つのトピックについての日米の新聞記事を比較分析することや、日米の映画を比較分析することだった。プロジェクトの成果として、グループごとに分析結果を報告するプレゼンテーション動画を作成してもらった。そして、その動画を互いに視聴し、評価してもらった。COIL プロジェクトにおける使用言語は、英語を基本とした。

南山大学の学生たちにとって、COIL プロジェクトへの参加は任意だったこともあり、参加学生たちの意欲は高かった。彼らは、異文化交流に挑戦したい、英語力を高めたい、留学の準備をしたいなどの理由で、COIL プロジェクトへの参加を希望したようだった。学力、英語力、責任感などの点において、優秀な学生たちが参加してくれていたように思う。その意味において、この COIL プロジェクトは、意欲のある学生たちにさらなる学びの機会を提供するような試みとして機能したと言えるだろう。

インターネットを使った国際連携活動には、いろいろな困難がある。時差の問題、技術的な問題、その場の雰囲気などの非言語情報が不足あるいは欠落していることによるコミュニケーションの問題は、その代表例だろう。学生たちは、これらの困難にもかかわらず、粘り強くコミュニケーションを続け、質の高いプレゼンテーション動画を作成した。彼らは、この COIL プロジェクトをとおして、異文化理解力と外国語力に加えて、不測の事態に臨機応変に対応する力、チームのメンバーと力を合わせながら問題を解決する力、与えられた課題を確実に達成する力などを高めたようだ。

現地での留学によって得られる学びのすべてを COIL が代わりに提供することはないかもしれない。その一方で、COIL には現地での留学にはない強みもあるように思われる。たとえば、COIL においては、日本の大学とアメリカの大学という地理的に遠く離れた二つの学びの空間が一瞬で結びつく。学生たちは、いつものように、いつもの大学に通いながら、別の国の別の大学に通う学生たちと一緒に学ぶことができる。この体験によって、学生たちは異文化が身近にあること、遠い国の出来事が自分たちの日常とつながっていることを実感するだろう。今回、アカデミック COIL プロジェクトを実施してみて、私自身もインターネットを使った国際教育連携の可能性に気づくことができた。

アカデミック COIL の大きな意義

南山大学外国語学部アジア学科准教授

宮原 佳昭

本報告は、2021 年第 3 クォーター（9 月中旬～11 月上旬）に実施したアカデミック COIL について、授業の概要、受講生の感想、報告者の所感の順にまとめたものである。

報告者側の科目名は「演習 II」で、報告者のゼミに所属する 3 年次生が現代中国の政治・社会・国際関係について学ぶ授業である。本 COIL のパートナー教員は Muhammad kabir 先生（ニューヨーク州立大学）で、相手の科目名は Sources of Insecurity in Asia である。参加学生は報告者側 10 名、相手側 25 名で、Google ドライブや WhatsApp などのツールを用い、英語による非同期型交流をおこなった。

事前準備としては、8 月から 9 月にかけて、Kabir 先生と協議して次の通りに進めた。①東アジア国際関係に関する 5 つのテーマ（ウイグル問題、台湾問題、南シナ海問題、アメリカ同盟ネットワーク、アジア安全保障）と各テーマの課題を設定した。②Google ドライブで 5 テーマ分の共有フォルダを作成した。③レポートのルールとルーブリックを作成し、共有フォルダへ共有した。④学生の希望をもとに、両教員の学生を 5 つのグループに振り分けた。

9 月からの授業では、初回に COIL 型授業の概要や取り組み方を説明した上で、ゼミ生に対して次の通りに指導した。①レポート完成までのスケジュールや分担を、相手と打ち合わせすること。②英語は翻訳アプリを活用すること。③問題に気づいたら、教員へすぐに相談すること。また毎回の授業時間においては、学生が各グループに分かれて作業を進め、教員が各グループの進捗状況を随時確認した。ゼミ生一同は終始高いモチベーションで授業に取り組み、期限までにレポートを作成できた。

ゼミ生 10 名に実施後アンケートをとったところ、次のような回答であった。「問 1 COIL 全体に関する感想は？」に対しては、「5：とてもよかった」2 名、「4：よかった」3 名、「3：どちらともいえない」4 名、「2：あまりよくなかった」1 名であった。「問 2 東アジア国際政治に関する学びが得られたか？」に対しては、「5：大いに得られた」2 名、「4：得られた」8 名であった。「問 3 グループワーク・協働（ひろく社会経験として）に関する学びが得られたか？」に対しては、「5：大いに得られた」2 名、「4：得られた」6 名、「3：どちらともいえない」1 名、「2：あまり得られなかった」1 名であった。

同アンケートに寄せられたコメントを分析すると、「アメリカ人学生の考え方を知ることができてよかった」「日本とアメリカの世論を比較することができ、視野が広がった」など東アジアの国際政治に関する学びが大いに得られた一方で、「こちらから連絡しても、アメリカ人学生側の反応が遅く、締切までにレポートが完成できるか心配した」「作業を分担していたアメリカ人学生が急にいなくなり、作業が滞った」などの点での不満が多かったことがうかがえる。一方で、「物事への積極性がグループワークにおいても、自分においても非常に大切だと学んだ。」「コミュニケーションをとる際に自分から積極的に話しかけることが重要であると学んだ」「時差もあり全く違う環境の相手と、メッセージだけのやりとりでワークを完遂する良い経験になった」と、グループワーク・協働に関する学びを得た学生も多かった。

報告者の所感としては、COIL 型授業の意義は大きいと考える。上記の学生コメントからも明らかとなり、東アジア国際関係について、またグループワーク・協働について、通常型の授業では得られない大きな学びを学生にもたらす貴重な機会であるため、今後も COIL 型授業の継続を強く願うものである。

授業手法のパラダイム・シフト

南山大学国際教養学部国際教養学科教授

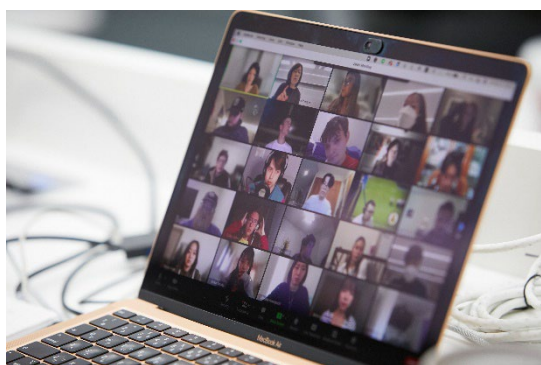
鹿野 緑

国際教養学部 3、4 年次生対象の学科科目 Special Topics: Sustainability Studies (Social Studies) の授業を、ノース・ジョージア大学 (UNG) Nishio Tomoe 先生担当日本語履修生との COIL の形で 2019 年度から行なってきた。その実践を、教員の立場から、授業手法の改革の試みとしてふりかえる。

まず、南山側の授業の組み立てを簡単に紹介させていただく。グローバル企業の英語公用語化や言語と人権などのテーマを扱いながら、専門の内容を第二言語である英語で学ぶことをねらいとして、UNG 生との授業を組み立てた。留意したのは次の三点である。第一に、双方の学生が内容を共有できるようにテキストを共通のものにした。そして、週に 2 回の授業の火曜日をレクチャーの日、金曜日を UNG とつながる同期型のディスカッション (special topics meeting) の日とした。評価はレクチャーを元にしたペーパー 50%、一連の COIL 活動を 50% とした。学生は、火曜日の授業で英文テキストを読んでから (UNG 生は各自読んでいる)、Canvas に論点 (discussion questions) を相互にポストし、金曜日の Zoom ミーティングに臨んだ。第二に、英文教材に日本語で用語解説・単語帳をつけた。「英語で学ぶ」ことの弱さにもなりがちな曖昧な理解を避けるのと、量を読むための足場かけのねらいがあった。学生は、週に 20~30 ページ程度読み進めて、ディスカッションに備えた。第三に、学生同士のディスカッションは全て学生に任せた。

授業の観察からわかったことは、学生同士が相互ポストした論点について共に考え、一生懸命コミュニケーションしようとしていた (共構築していた) ことである。金曜日の 100 分はあっという間だった。おそらく終了のベルがなければ、学生はそのままずっと英語でしゃべり続けていたかもしれない。「英語で協働学習する相手がいる」ことは非常に効果的な仕掛けになっていた。また「海外の教育文化と世界基準に触れる」ことは、学生の学びへの姿勢を変えさせるばかりか、教員の授業の仕立てを変えさせる可能性を持つと感じた。COIL は授業手法改革への一つの仕掛けである。教員が日本の教育文脈から離れて新たな基準を知り、授業手法の新たなオプションを手に入れることを可能にするのではないだろうか。

この授業のシラバス策定と実施に関しては、緻密に授業を計画される Nishio 先生におおいに引っぱっていただいた。また、国際センターの proactive な主導なしでは、このようなパラダイム・シフトは不可能であったと思う。感謝を申し上げます。



ノース・ジョージア大学との COIL 授業の様子

国際産官学連携 PBL C がもたらした価値とは

南山大学国際センター特別任用講師

山田 貴将

1. 国際産官学 PBL C 実施スキーム

国際産官学 PBL C では、南山大学、天津師範大学、小島プレス工業株式会社（以下、小島プレス工業）が、以下の 1 から 5 の Step に従い、日本語を媒介言語として用いながら 8 週間に渡りオンラインによる国際協働に取り組んだ。

Step1. 課題提示

小島プレス工業から「10 年後のクルマの形をデザインする」という課題が提示された。

Step2. オンライン協働

Step1 で提示された課題に対する解決策を提案すべく、南山大学と天津師範大学の学生が 8 週間に渡ってオンラインで協働した。

Step3. 教育的仲介

Step2 の期間中、担当教員は、学生と緊密に連絡を取り合い、モチベーションの維持を図ったり、グループワークの方向性を確認しながら、適宜、助言やフィードバックを与えた。

Step4. プレゼンテーション

最終授業で 8 週間に渡る協働の成果をプレゼンテーション形式で発表した。

Step5. 評価及びフィードバック

小島プレス工業及び担当教員が評価シートに基づいてプレゼンテーションを評価し、フィードバックを与えた。

2. 参加者

PBL C の参加者は、全体で 40 名であった（内訳は、南山大学 13 名、天津師範大学 20 名、小島プレス工業（株）4 名、教員 2 名、TA1 名）。

天津師範大学からの参加者は日本語を専攻する 1 年から 3 年次の学生であり、中級から上級レベルの日本語運用能力を有していた。同学では、本プロジェクトは、正式な授業としてではなく「第二課堂（課外活動）」として位置づけられたため、ボランティアベースでの参加となった。一方、南山大学では、PBL C は共通教育科目（1 単位）として設置され、3 学部 4 学科（外国語学部・アジア学科、外国語学部・英米学科、総合政策学部・総合政策学科、経営学部・経営学科）の 2 年から 4 年次の学生が履修した。

3. PBL C がもたらした価値とは

上述のオンライン国際協働が 3 団体にもたらした価値のうち、本稿では①小島プレス工業及び②南山大学の学生にフォーカスして考察する。

先ず、小島プレス工業にとっては、①斬新なアイデアが得られる、②中国現地の生の情報が得られる、

③異文化の視点に触れられる、④学生と直接交流することができる、の4つ価値が提供されたのではないかと考えられる。ここでは、とりわけ重要だと思われる①と②について紹介したい。

① 斬新なアイデアが得られる

本プロジェクトへの参加学生は人文学系の学生が圧倒的であり、技術的な知識は持っていなかった。しかし、小島プレス工業によれば、前提知識を持っていないことがイノベティブなアイデアの創出には効果的に働くこともあるという。実際、学生の成果物（図1）からもそのことがうかがえる。このグループは、車の前後を分け、後方部分を目的や行先、価格帯に応じて取り換えが利くシステムを提案した。

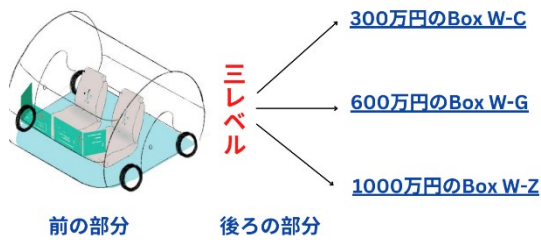


図1

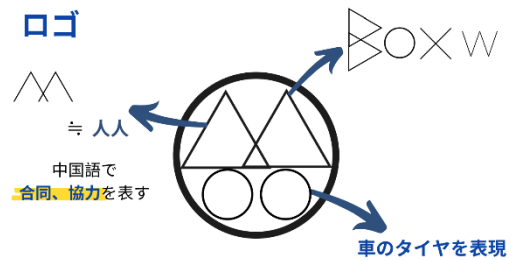


図2

また、商品を企画するだけでなく、日中混合チームならではの多文化の視点が反映されたロゴマークまでデザインした（図2）。円内の2つの三角形は、合同や協力を意味する中国語の漢字の「从」とこの自動車の車名である「Box w」のBから来ている。

このような発想は、中々社内のエンジニアからは出てこないそうである。なぜなら、前提知識が自由な伸び伸びとした発想を妨げてしまうからである。このような学生ならではの「突飛な」発想に触れることができることこそが、小島プレス工業にとってPBL Cに参画する最大の醍醐味であると言えよう。

② 中国現地の生の情報が得られる

PBL Cでは、多くのグループがSNSを活用し、様々なアンケートを実施していたようだ。あるグループは、「自動車に対する若者の考え方」をテーマとして日中双方でアンケートを実施した。日本人回答者にはgoogle フォーム、中国人にはWeChat を利用し、それぞれ60名以上もの回答を得た。図3は結果の一部である。

⑤ 10年後の車に最も求めることはなんですか？

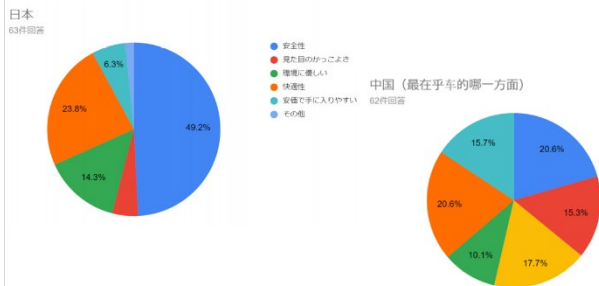


図3

アンケートから分かったこと

- ニーズ①**
車は欲しいけど多くのお金はかけたくない
- ニーズ②**
運転中の困っていることを解決したい!
- ニーズ③**
さまざまな用途に合わせて使い方を变えたい

図4

10年後の車に求めることとして、日本人学生は圧倒的に「安全性」を重視しているのに対し、中国人学生は、「安全性」に加え、「外観」と「性能」も同等に重視している傾向が示されている。また、このグループは、単にアンケートを取るだけでなく、図4にあるように、アンケート結果を分析し、日中の若者の自動車に対するニーズに関して自分たちなりの仮説を立てた上で企画立案を行った点が高く評価できる。このアンケート結果の信頼性を評価することは難しいが、それでも日本国内では簡単には入手できない中国の若者の「自動車観」に関するデータとして一定の価値は持つものと思われる。

次に南山大学生にとってPBL Cのもたらした価値に関しては、課題として課した最終レポートの記述に基づいて分析した結果、以下の2点に集約できると思われる。

①スキル・知識面

商品企画、アイデア出し、プレゼンテーションに関してレベルが向上したと多くの学生が振り返りをしていた（キーワード：「創造と破壊」、「ペルソナ」、「共感」）。

②マインドセット面

「働くことに対して具体的にイメージができるようになった」、「仕事をしていく際の情熱の大切さを知った」という声が聞かれた。これらのマインドセット面の成長は、一人一人の参加学生の就職活動を含むキャリア形成にポジティブな影響を与えていると考えられる。

4. 最後に

今回は、紙幅の関係で連携企業と南山大学生にとっての価値のみを取り上げたが、もしかしたら、最も多くの価値を感じているのは筆者自身かもしれない。PBL Cの企画段階における小島プレス工業、並びに天津師範大学との複数回に渡る交渉・打合せを通じて筆者自身の視野が格段に広がった。また、3つの異なる組織間の意見調整プロセスからも多くの気付きと学びを得ることができた。その意味において、COILのL(Learning)は、教員にとっての学びでもあると言えよう。ここで改めて、小島プレス工業の伊藤剛一様、中村忍様、中西秀夫様、市川寛様、天津師範大学の張楠先生に心から御礼を申し上げたい。

SDGs をテーマに社会課題の解決を目指した製品・サービスを提案する
PBL COIL 授業デザインと実践について

南山大学国際センター特別任用講師
小野 詩紀子

2022年度のPBL COIL D2科目では、地元の名古屋市に本社を置くブラザー販売株式会社（以下、ブラザー販売）と連携し、2016年に発効されたSDGs（持続可能な開発目標）を軸に社会課題解決を目指した製品・サービスの提案をテーマに、授業を実施した。今回の授業では、10名の南山生と、University of Maryland, Baltimore County（以下、UMBC）でDr. Tomoko Hoogenboomの教えるBusiness Japaneseを受講する8名の学生が、第3クォーターの7週間、6グループに分かれて協働学習を行なった。協働学習を通して、クリティカルシンキング力、問題発見解決力を身につけることを目的に学習内容をデザインした。学習プロセスとしては、7週間の間に、課題に対して深い理解を形成し、協働で調査、議論を重ね、8分のプレゼンテーション動画にまとめあげることを行った。

今年度の授業を終え、プロジェクトをデザインし、実施する教員として最も重要であると感じていることは、①学生・連携企業双方にとって魅力的なプロジェクト課題を見つけること、そして②プロジェクトにおけるチーム形成を丁寧に行うことである。まず①について、本授業における教員の、連携企業と学生を繋ぎ、双方にとって気づきや学びの多いプロジェクトを企画するコーディネーターとしての役割に着目したい。本授業のデザインにおいては、課題を先にはなく、連携してくださる企業を先に見つけた。その出発地点から、プロジェクト課題を決定するまで、コーディネーターとして下記の4つのステップを約3ヶ月かけて実施した。

Step 1：ブラザー販売への課題アイデアの聞き取り

Step 2：課題アイデアと学生の興味関心のマッチングについてUMBC教員や国際センター教員と検討

Step 3：学生の課題の取り組み方の検討

Step 4：ブラザー販売とミーティングの上、課題決定

この3ヶ月は一見長いように感じられるが、必要なプロセスである。その理由は②で述べたチーム形成に関わるからである。ここで言うチーム形成とは、プロジェクトを進める関係者が互いの力を発揮し、プロジェクトの成功を目指す1つのチームとして機能するための準備活動を指す。PBL COIL科目は関係者が多く、企画段階では南山教員、UMBC教員、連携企業が1つのチームとして課題を決め、授業における学習プロセスの共通理解を作ることに時間を要する。学生同士の協働の前に、教員・連携企業の健全な協働に力を注ぐことがコーディネーターとしてリーダーシップを発揮すべきところであると感じている。各教員、ブラザー販売で構成される企画チームが機能していたからこそ、表1にある通り、ブラザー販売の方からだけではなく、アメリカの支社の方にも講義をいただき、より企業のSDGs活動を多面的に捉えられる授業を展開できた。

表1：南山大学における授業内容（オリエンテーションはオンラインで実施）

日程	学習内容
オンラインオリエンテーション	<ul style="list-style-type: none"> ● チーム形成アクティビティ（日米同期型） ● ブラザー販売会社紹介
第1週（対面）	<ul style="list-style-type: none"> ● SDGs についての講義、ディスカッション ● ブラザー販売より課題、取り組み方、SDGs 活動についての説明
第2週（対面）	<ul style="list-style-type: none"> ● Brother International Cooperation(U. S. A.)による SDGs 講義、ディスカッション ● 協働学習の進捗報告、教員・ピアフィードバック
第3週（対面）	<ul style="list-style-type: none"> ● 中間報告書作成準備 ● 協働学習の進捗報告、教員・ピアフィードバック
第4週（対面）	<ul style="list-style-type: none"> ● 中間報告、ブラザー販売・教員・ピアフィードバック
第5週（対面）	<ul style="list-style-type: none"> ● 最終発表に向けて検討課題の洗い出し、報告、教員・ピアフィードバック
第6週（対面）	<ul style="list-style-type: none"> ● 提案内容のキャッチコピー検討 ● 最終発表準備
第7週（対面）	<ul style="list-style-type: none"> ● 最終発表、ブラザー販売・教員・ピアフィードバック

次に②に関し、日米学生のチーム形成について13時間の時差を超えてチームとして機能することを促すために、授業外でZoomを使用した日米同期型オリエンテーションを行った。学生たちはこの時間を使って自己紹介、連絡先の交換、ミーティングの時間決めなどを行い、翌週からのプロジェクトを円滑に進める基盤を作った。また学生たちには、毎週のミーティングでファシリテーターと記録係を1度は務めてもらうようにし、その議事録を課題として提出してもらうことで、ミーティングの実施を促し、形成的評価に役立てた。

上記の①・②を実施した結果、日米の学生たちは、各グループで着目したい社会課題を見つけ、その解決に寄与する新規製品やサービスを検討し、ブラザー販売の収益性に至るまで調査・検討を重ねた上で、最終提案をまとめることができた。最終発表では、「医療×フードロス」という社会問題に着目し、ブラザー製品のスキャニング技術を活かして食べ物の可食部を判定する機械の提案や、「服の大量生産・大量消費」という社会問題に着目し、既存製品であるガーメントプリンタで使わなくなった古着に新たなデザインを印刷し消費者に戻すというサービスの提案など、評価者の予想を超えた柔軟な発想でつくられた提案が行われた。また、学生たちは協働の中で互いの多様性を認め合った上でコミュニケーションをとる重要性を学び、お互いの意見に耳を傾け、新たな考え方、捉え方を吸収し合っていた様子が見られた。

今年度、学生にとって関心の高いSDGsをトピックに、授業を実施したが、学生・連携企業双方にとって実りのあるプロジェクトが実施できた。今年度の課題・授業展開はSDGsネイティブ世代と呼ばれる学生層の発想に興味を持つ他企業との連携に展開できるものであろう。この取り組みをきっかけに、さ

らなる「SDGs への貢献」と、「南山生×協定校×地元企業」の連携を強め、学びの機会を拡充する取り組みを行なっていきたい。



学生の最終発表の様子



SDGs をテーマにした製品・サービスの提案例



ブラザー販売から学生へのフィードバック



集合写真

IV. 米国連携校との取り組み事例

上級日本語クラスにおける国際協働学習の効果 ―産官学連携 PBL COIL の実践を通して―

Arizona State University

School of International Letters and Cultures

Teaching Professor in Japanese

下村 朋子

アリゾナ州立大学日本語学科では、四年前から南山大学と国際協働学習プロジェクトを実施してきた。1年生から3年生までの日本語クラスの学生を対象に、ベーシック COIL、アカデミック COIL、PBL COIL を取り入れた言語学習活動を展開し、日本語学習に良い効果をもたらしている。初級日本語のクラスでは、ASU に短期留学を予定している南山の学生達とお互いの大学や街の様子などについて日本語と英語で情報交換をした。中級日本語のクラスでは、南山大学経済学部クラスのクラスとアカデミック COIL のプロジェクトを実施した。省エネ、ゴミ処理などのサステナビリティに関するトピックについてグループで意見を交換し、発表を行った(注1)。上級レベルのビジネス日本語のクラスでは、4回の PBL COIL プロジェクトを実施した。この報告では、2022 年秋学期に行った PBL COIL の実践内容を中心に COIL 教育の効果、困難さ、教員への影響についてまとめ、最後に今後の COIL の展開について述べる。

ビジネス日本語のクラスでは、愛知県庁の依頼による「アメリカの高校生の修学旅行を愛知県に誘致するためのツアーを企画する」という設定で PBL COIL を実施した。南山大学の学生グループとのやりとりは基本的に日本語で行い、旅行企画の発表ビデオ作成は日本語のみで行った。ツアーを企画するにあたり、アメリカの高校生の興味・関心について知るためにフェニックス市近郊にある高校の日本語クラスの生徒を対象に数回アンケートを実施した。約 170 名の高校生から回答をもらい、グループごとに高校生にインタビューも行った。集めた情報をもとにツアーを企画し、ツアーポスター(注2)を作成した。最後に高校生にポスターを見せ、参加してみたいツアーに投票してもらった。ツアー企画のためのマーケットリサーチ、また、擬似クライアントから企画した作品にフィードバックをもらうことで、ビジネス場面の現実味のあるプロジェクトができた。

ツアー企画発表時に、愛知県庁の方々とはツアー企画立案の際にアドバイスを下さったオレンジ・アンド・パートナーズの佐藤様から評価を受けることで、学生の COIL に取り組む様子は真剣さが増したようであった。将来グローバルなビジネス場面での活躍を希望している学生にとって、このようなビジネス擬似体験ができるプロジェクトに取り組めたことは貴重な経験になったといえよう。プロジェクト後に学生が提出した感想では、ほぼ全員が南山大学の学生たちとの協働作業を通し自分の日本語力の向上を実感したと述べている。このプロジェクトに先立ち、自分の日本語力を心配していた学生は、「COIL のお陰で自分に自信が持てるようになった」「今後の自分の言語学習の課題が分かった」と述べていた。

COIL の問題点は日米の時差である。これは解決できない問題であるが、初年度に実施した COIL に比べると学生たちは意見交換がし易くなったのは確かである。それは、近年のテクノロジーの進歩と、コロナ禍によるオンライン学習環境の変化により、グループでのビデオコミュニケーション技術が発達し、より簡単に参加できるツールができたおかげだと言える。

COIL 実施に関して最初の数年間は教師にとって手探りの状態であったが、毎年話し合いをし、改善を重ねることで、学生たちの効果的な学習を促すことができるようになったと思う。南山大学と実施した

COIL 型授業が、学生の日本語学習に対する意欲と日本語力向上に貢献しているということは言うまでもない。テクノロジーの進歩と社会のグローバル化の中で、この COIL を今後どのように日本語教育の中で取り入れていくかが新たな課題になったと言える。

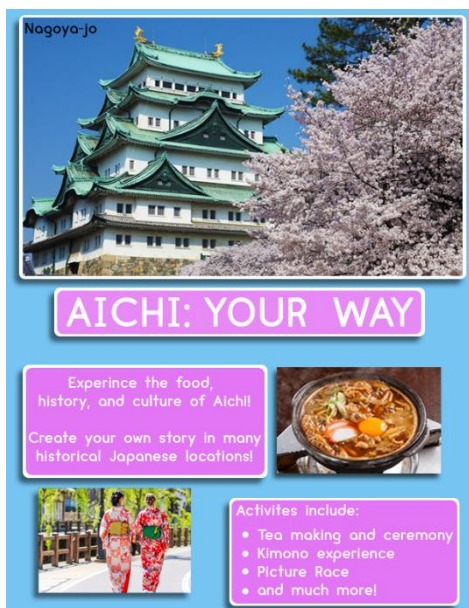
日本語教育のさらなる発展のために、今後も南山大学と COIL を継続できればと願っている。

注 1. 実践報告についての詳細は下記を参照

Nakamura, Yukari/中村行里 [Arizona State University/アリゾナ州立大学] (2022), 「パンデミックを乗り越えて- COIL Project 日本とアメリカで環境問題を考える」 The 29th Central Association of Teachers of Japanese Conference (第 29 回中西部日本語教育学会), Proceedings, pp.110-123, University of Illinois at Urbana-Champaign

<http://publish.illinois.edu/catj29uiuc/files/2022/10/CATJ29-Proceedings.pdf>

注 2 ツアーポスター (学生の作品)



COIL 教育の効果 学生からのフィードバックより

Dickinson College
Senior Lecturer of Japanese
目黒 秋子

我が校では、日本語の 1 年生から 4 年生（日本語初級～中上級クラス）の合同クラスが南山大学の経済、経営学科の英語クラス（Thomas Bieri、Joseph Wood）と、定期的に言語交流（Language exchange）という形式で交流を行った。双方ともに、外国語のクラスで目標言語の母語話者と話す機会を定期的に持てたことはとても大きな意味を持つ。

一学期に 3 回～5 回程度、南山大学の英語クラスの授業時間内、当校では午後 7 時半より、最初は Skype、2020 年秋からは Zoom を用いて学生同士を 1 対 1 で言語交流を行わせた。日本語で話す時間を 25 分程度、英語で話す時間を 25 分程度と各言語で話す時間を分け、各言語の時間でトピックを変えた。我が校の対象学生は日本語初級～中上級クラスとレベルが異なるため、レベルごとに異なる課題を与えた。日本語の時間は日本人の学生に質問をしたり、インタビューをすることをきっかけに、発展会話を楽しむという形式にした。課題の例としては、1 年生の課題としては「私の家族」「心に残る旅行」について話すなど最近導入された文法を使って話す、3 年生の課題としては教科書のトピックでもある「日本のスポーツ」「日本の食べ物」などについてインタビューさせるなどした。英語の時間は南山大学の英語クラスの課題にディキンソン大学の学生が答えた。

Zoom を使ったこの交流は学生からの評判が非常に良かったが、特にコロナ禍で完全オンライン授業であった 2020 年～2021 年春学期は、南山大学の学生との交流は当校の学生にとって人と繋がれる一筋の光のような活動として強く印象に残った。

2022 年 9 月～12 月に言語交流に参加した学生からのフィードバックの例をいくつか紹介する。

初級学生 1

I like the exchanges because they are challenging.

Overall, I enjoyed the exchanges. I thought they were fun and they pushed me out of my comfort zone. I was surprised that they could understand me because I thought I sounded really bad. It was fun communicating with them. Once we switched to English it was easier to me and I realized they are struggling too. I like the exchanges because they are fun and let me use my skills in a real setting.

Exchange はチャレンジングなので好きです。

言語交流を楽しみました。エクスチェンジはおもしろくて、自分をコンフォートゾーンから押し出してくれます。自分の日本語はひどいと思っていたけれど、パートナーが私の言ったことを理解してくれて驚きました。英語の時間になった時、自分にとっては楽でしたが、パートナーも英語を話すのが大変だということに気づきました。エクスチェンジはおもしろいし、自分のスキルを本物の状況で使えるので好きです。

初級学生 2

I did feel like they were helpful. At first, they made me very nervous, but with each exchange I felt more comfortable and could see how my Japanese skills had improved since the last session. There are also very few opportunities to talk to people my age in other countries, so it's very interesting to see what is different about our lives and cultures. In this last exchange, I even felt like my partner and I were able to help each other- he helped me complete a few phrases I wasn't quite sure how to say in Japanese, and I helped him come up with some English words he couldn't remember.

エキスチェンジは役に立つと思いました。最初、すごく緊張しました。でも、言語交流をするごとに、だんだん慣れてきて、前のセッションより自分の日本語のスキルが上がっていると感じました。またアメリカにいと私と同じ年ごろの人と話す機会が少ないので、私たちの生活や文化がどう違うのかを知ることはとてもおもしろかったです。最後のエキスチェンジでは、私のパートナーと私はお互いに助け合っていると感じました。彼は私が日本語の文を言うのを手伝ってくれたし、私も彼が思い出せない英語の単語を教えてあげたりしました。

中上級学生 1

This exchange was probably the best because I was able to learn all about different foods she ate and Japanese eat. I was shocked to find out that in Japan they ice cream cakes too which I thought was a more American or western food. She told me about the foods she eats for Christmas which was KFC and I thought that was really interesting because in America we always make our own food for the holiday. We also talked about traditional foods for New Years which was nabemono and sukiyaki dishes. We also talked about the flavor of mint and how it is common in both the US and Japan for people to either love mint flavored things or hate it because it tastes too much like toothpaste. Even though these topics were quite random, I felt more connected to my partner because of all the things we were able to share in common even though we grew up in two completely different places.

今回のエキスチェンジは今までで一番よかったです。なぜかという、パートナーの食べたいろいろな食べ物や日本人が食べるものについて学ぶことができたからです。私は日本にもアイスクリームケーキがあるということを知ってびっくりしました。アイスクリームケーキはアメリカのものだと思っていたからです。パートナーはクリスマスに KFC を食べるということを通してとてもおもしろいと思いました。アメリカではクリスマスや祝日には自分の家で料理をするからです。(中略) また、ミント味についても話しました。アメリカでも日本でも好きな人もいますが、はみがきのような味なのできらいな人がいるということです。トピックは様々でしたが、私たちは全く異なる場所で育ったのに、共通することがたくさんあるということがわかって、パートナーとのコネクションを感じました。

このように、この言語交流活動はクラスで習った言語を実際に使える機会として有用なばかりではなく、学生達は相手の習慣や文化について学び、お互いについて共通点及び相違点を発見することができたようだ。また、外国語学習の難しさを共有し、お互い手助けをすることを通じて友情を育むことができたと感じているようである。言語交流をきっかけに SNS などにつながり、授業外で個人的に交流を続けている学生もいる。COIL プログラム終了後も継続して南山大学の英語クラスとの言語交流を日本語プログラムの一環として続けていきたい。

南山ジョージタウン COIL プロジェクト

Georgetown University

Director of the Japanese Language Program

森 美子

ジョージタウン大学は南山 COIL プロジェクトに 2 回参加した。1 回目は 2019 年秋学期、本校の初級から上級の 4 つの日本語コースと、南山大学外国語学部英米学科の 3 つの英語コースと経営学部のプレゼミ（2 年時に修得するセミナー）がそれぞれ異なるプロジェクトを行なった。2 回目は 2021 年秋学期、本校の初級コースと南山大学の English Literacy のコースで Zoom による交流を行った。

1. メール交換・Zoom 交流

2019 年秋学期、本校の日本語レベル 1 の履修者 35 名と南山大学の Advanced English の履修者 25 名がメール交換を行った。レベル 1 は日本語を初めて学習するコースで、在籍者は 1 年生から大学院生まで、専攻も様々である。これに対して、Advanced English の履修者全員が英米・英語学専攻の 2 年生だった。教員がランダムに日米のペアを割り当てた後は、各ペアで自由に自己紹介をしたり、好きな話題でメールのやりとりをした。メール交換の頻度はペアによって違うが、学期末評価では、学期を通して 3-4 回という回答が多かった。学期の始めは英語でのやりとりが多く、学期が進むにつれ少しずつ日本語が増えていったようである。2021 年秋学期は、本校の日本語レベル 1 の履修者 33 名と南山大学の English Literacy の履修者 24 人が Zoom での交流を 3 回行い、ビデオと報告書を提出させた。

2. Facebook での SNS 活動

本校の日本語レベル 2 と 3 の履修者計 33 名と南山大学の Advanced English の履修者 34 名が Facebook で SNS 活動を行った。レベル 2 は日本語 2 年目、レベル 3 は 3 年目のコースで、在籍者の学年も専攻も様々である。一方、Advanced English の在籍者全員が英米・英語学専攻の 2 年生であった。主な活動は、各学生が自己紹介や大学紹介の動画や文章を Facebook Group に投稿し、相手校の投稿に「いいね」を押したり、コメントを書き入れたりすることである。米国側は日本語、日本側は英語で投稿した。さらに、日米でペアを作り、双方のコースプロジェクトに情報提供者として協力し合う活動も取り入れた。このやりとりには Messenger か LINE を使うペアが多かった。使用言語は学生の判断に任せしたが、米国側が日本語で質問したときは日本側も日本語で答え、英語についても同様にしたようである。

3. Canvas を使った協同研究

本校のレベル 4 の履修者 16 名と南山大学経営学部の人材資源管理プレゼミの履修者 22 名が小グループで協同研究を行なった。レベル 4 は日本語 4 年目以上の学生が対象で、履修者の学年も専攻も様々だが、ほとんどが留学や仕事で一学期から数年間、日本に滞在した経験を持つ。一方、南山大学の学生は全員が経営学専攻の 2 年生で、海外経験のある学生は一部であった。研究課題は、職場とジェンダーに関することで、各グループが話し合っ

女性管理職の割合、育児休暇取得率、働き方や職場環境、セクハラ、日米の採用制度の違いなどである。自己紹介と協同研究の経過報告と最終レポートはCanvasで共有した。使用言語は全て日本語で行なった。

メール交換 (2019年秋学期、日本語レベル1)

Email Exchange

にほんのがくせいに にほんごで メールをだしましょう。Please write the first draft of an email message to a Japanese student. Make sure that your email message contains the following information. Using Lisa-san's message as a sample, write your own message on the next page.

- Self introduction**
 - Proper greeting to a person you talk to for the first time
 - Your full name
 - How you want to be called
 - Your school and which grade you are in
 - Your major
 - Your hometown
- A little more about yourself**
 - What you do daily/occasionally, and things you like
 - What you did on the weekend or what you are planning to do this weekend
- A couple of questions to a Japanese student**
- Closing remark (a phrase, not a salutation)**

---さんへ

はじめまして。わたしのなまえはxxxです。です。xxxとよんでください。わたしはジョージタウンだいがくのねんせいです。せんもんはコンピューターです。しゅっしんはカリフォルニアのサンフランシスコです。

わたしはまいにちアニメをみます。わたしはアニメがすきです。さいきん、『きめつのやいば』をみます。『きめつのやいば』のマンガもよみました。わたしはいぬがいます。なまえはモリーです。モリーはともかわいいです。ひなさんはいぬがいますか。こんばん、ともだちとミルクティーをのみました。おいしかったです！

---さんはだいがくでなにをべんきようしますか。しゅうまつは、なにをしますか。アニメをみますか。なにがすきですか。

では、どうぞよろしくおねがいします。これがわたしのインスタグラムのアカウントです@xxxx。これがわたしのしゃしんです。

XXX

Zoom 交流 (2021年秋学期、日本語レベル1)

Zoom Meeting Report



---さんはなんさんのキャンパスがたいすきです。なんさんたいがくのキャンパスのちかきにスターバックスがひとつあります。---さんはスターバックスへいきます。なんさんたいがくのキャンパスにしくどうがみつあります。

- ---さんはしくどうでエビカツをたべました。
- ---さんのせんせいのけいさくうしつはキャンパスのなかにあります。なんさんたいがくのキャンパスにひなさいいがありません。キャンパスにとしかんががあります。でも---さんはおもにいえてべんきよします。
- ---さんのうちにルームメイトがいませぬ、いぬもいませぬ。

SNS 活動 (2019年秋学期、日本語レベル2)

Intensive Second Level Japanese I

Georgetown University

SNS 活動 (2019 年秋学期、日本語レベル 3)

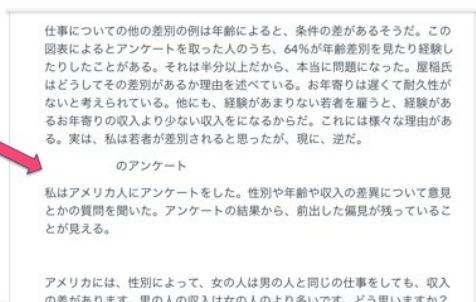


Third Level Japanese Georgetown University 出身地の紹介



協同研究 (2019 年秋学期、日本語レベル 4)

Collaborative Research Project



COIL Report and Reflections

Northern Kentucky University
School of Media and Communication
Professor
Yasue KUWAHARA

The following courses were offered during the past four years:

JPN 340	Business Japanese	Spring 2019
POP 250	International Popular Culture	Fall 2019 & Fall 2020*
POP 345	Japanese Popular Culture	Fall 2021*

*All POP classes were paired with Dr. David Potter's International Politics classes. Activities included interviews and questionnaire surveys.

Student responses were overwhelmingly positive. Students particularly enjoyed an opportunity to directly communicate with Nanzan students. This is a noteworthy achievement as students at Northern Kentucky University (NKU) have limited opportunities to be exposed to cultures other than their own. Part of the nation's 30th largest metropolitan area known as the Greater Cincinnati, Northern Kentucky is conservative politically and culturally with over 90% of residents being white. Thus, the COIL experience broadened students' horizons. For instance, one student commented:

I enjoyed this [COIL] module even though I didn't originally think I was going to. I had known that Americans and Japanese had a friendly outlook towards each other, but I couldn't help feeling like there would be some awkwardness, introducing ourselves over the Internet to strangers and expecting a discourse. I was wrong. I learned a lot about our Japanese counterparts at Nanzan, and reading their replies in the discussion board felt just the same as reading the discussion board with my fellow NKU students. ...but what surprised me the most was the common interest between the two cultures. Many students shared the same hobbies such as traveling and movies, some even shared the same favorite movies.

The fact that Dr. Potter's classes had international students was an additional benefit to NKU students:

One thing that surprised me was that quite a few of the students were not from Japan, many said that they moved there to go to school and that before arriving in Japan they had known nothing about Japanese culture. A lot of the students seemed to have traveled quite a lot, which I am sure is due to their interest in learning about other cultures, but overall, I found the discussion to be very helpful in gaining new information when it comes to Japan.

On the other hand, the challenge I experienced was coordinating the academic calendars between the two universities. The beginning of COIL coincided with the mid-term and the fall break at NKU which was not an optimum time to introduce a new project. Also, the limited time allocated to it was a disappointment to students as the following comment represents:

It was very cool to be able to read and respond to people living in another country that primarily speak another language without any issues. If the COIL program continues in the future, I would like to see more time allotted to the project. Although I enjoyed talking to the Nanzan students, I feel like we did not have enough time to properly learn about each other... I would like to see more time dedicated to talking with Nanzan students with more discussion posts and projects.

Another challenge I experienced was a lack of manpower to take full advantage of COIL opportunities. The Japanese Program which had been a minor when COIL had begun became a major in the following year. While the number of students and course offerings increased, instructors did not, leaving hardly any time to embark on the COIL projects. Additionally, the number of staff in the International Education Office decreased, making it difficult to adequately support COIL initiatives. Partly because of this, I was not able to get faculty buy-ins or administrative support.

The past four years have taught us that COIL is beneficial to NKU students who enjoy an opportunity to interact with Nanzan students. I'd like to continue offering COIL classes for this reason. What we need is a centralized effort to promote COIL among students, faculty, and possibly even those in other schools in consortiums. My goal for 2023 is to begin implementing tips and ideas given by the colleagues who attended the symposium. Additionally, Dr. Potter and I are interested in promoting COIL in non-Japanese language classes.



COIL students attending the *Chindonya* Performance at NKU

What is your perception of Americans? What do you think about Americans?

- I have never been to the United States but what I know is that it's a racially and ethnically diverse country. So, I personally think that Americans seem to be more multicultural compared to people from other countries.
- Americans have own idea and they can make their point.
- I think Americans have their opinions than Japanese. They are very kind and friendly.
- America is a freedom country and everyone can accept anything.
- I think Americans are very friendly, such as hug, and kiss.
- I'm having a good perception of Americans. Maybe my life in America had a positive impact on me.
- I have the image that America is a free country. I feel that people have their own opinions. I like that. Last year I was planning to study abroad in the United States for a year. But I didn't go because of Corona. I want to go to America in the future.
- My image of American is all big. Also, almost all Japanese are shy whereas, all American people everyone looks friendly!
- I feel like they are friendly, and everyone is good at giving speeches.
- My perception of Americans is they are very direct, self-aware, free to express opinions. America is a free country, but it has some social issues.
- They are really talkative and interactive.
- Americans claim what they really want to tell. I think most Japanese people just agree someone's opinion even if they have their own ideas.

NU student responses to NKU COIL student questionnaire

クイーンズ大学における COIL Project の拡大化への取り組み

Queens College, the City University of New York

Director of Japanese Studies

藤本 まり

クイーンズ大学では2019年より COIL Fellow を発足し、様々な分野で活躍する学内の教員を毎学年募り、月々の研究会で COIL を授業の一環として組み入れながらどのようにして学生達に有意義な学習経験をする場所を与え、かつ国際的研究の向上が可能になることに力を注いできた。そして2022年の秋学期現在、本校では17項目に及ぶ COIL を組み込んでいる授業 [1] が存在し、言語に限らず、経済学や心理学などの分野で学生達は COIL が行われる授業を受講することが可能となった。また、今学年も新たに12名の教員が COIL Fellow に加わり、近い将来には今まで以上に COIL プロジェクトを体験できる授業数が増えることを見越している。

また、クイーンズ大学の日本語と文化の授業では過去五年間に約100名の学生が COIL が一環とされた授業を受講し、COIL プロジェクトが学期末の最終課題としての重要な役目を担っている。形式としては南山大学とクイーンズ大学の学生達がチームを組み、ともに研究課題を話し合い決定し、アンケートや面談などから集められたデータを基にビデオ形式のプレゼンテーションを完成されるというものだ。

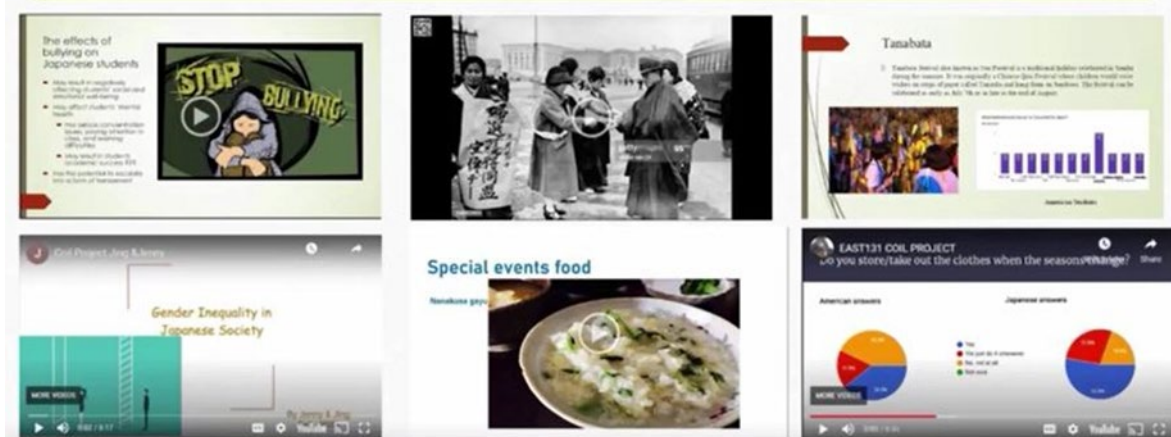
2021年秋学期の COIL 受講学生 (28名) を対象した調査 [2] によると56.4%が COIL プロジェクトとを始めるにあたって不安、又はとても不安と回答したものの実施後には81.3%の学生が COIL プロジェクトは優秀、又はとても良い学習経験であったという回答を出している。更に、COIL プロジェクトから文化交流のみならず大学卒業後に企業から必要とされているソフトスキルの中で特にコミュニケーション能力 (92.3%)、チームワーク (72%)、国際的な視野 (67.9%) などの向上に大変役立ったと回答した。その上、学期が終了した後でも数名の学生からは未だに南山大学の COIL パートナーと連絡を取り合っているという報告を受けている。

最後に、COIL プロジェクトを成功させる過程で教員に並々ならぬ負荷がかかることも明確となった。COIL 実施前の綿密な準備はもちろんのこと、プロジェクトが円滑に行われる為の学生と教員との密なコミュニケーションの必要性、予想外の出来事への柔軟かつ迅速な対応など数々と学ぶところがあった。しかしながら、学生達が COIL プロジェクトから得られる経験を鑑みるとこれからも持続していくことが重要だと考えられる。



クイーンズ大学教員による COIL 研究会 第一期 (2019-2020)

Students' Video Presentations [Culture]



学生のプレゼンテーション例

参考文献

- [1] QC COIL course listing: <https://www.qc.cuny.edu/coil/wp-content/uploads/sites/49/2021/12/Queens-College-COIL-course-list.pdf>
- [2] Fujimoto, M. (2022, October 7-8, 2022) *Facilitating Career-Readiness in the Humanities: The Collaborative Online International Learning (COIL) Project in Japanese Language and Culture Courses*. New York Conference on Asian Studies, Syracuse, New York, United States.

COILによる異文化交流と気づき

University of Maryland, Baltimore County
Senior Lecturer・Japanese Area Coordinator
フーゲンブーム 智子

メリーランド大学ボルチモアカウンティでは、この5年間にPBL-COIL 2回、Academic COIL 8回、そしてビデオ交換 1回と合計 11 回にわたって南山大学との COIL をコースに取り入れてきた。

学生からのフィードバックによると、COIL 教育の効果としてトピックに対する多角的な見方の構築、また日本語コースでは日本語を使っての話し合いの成就という 2つのポイントがあげられた。さらに PBL-COIL においては前出の 2つに加え活動グループ内での相互扶助の確立という意見が出た。COIL の困難さとしては、同期活動の時間調整またグループメンバー同士の連絡の困難さ、そして貢献度の差異などが見られた。さらに PBL-COIL では、課題が抽象的だったため何を期待されているのか把握しにくかった、情報量の違いによるグループ内での混乱などがあげられた。COIL 教育の課題全てが 3 名から 5 名の小グループでの活動だったこともあり、メンバー間の相性により課題に対する学生の意欲が異なってきたのではないかと考える。さらに、積極的に自己の意見を相手に伝えるアメリカ文化と相手の出方を待つ日本文化の違いも見られ、それが貢献度の不平等さという認識につながった可能性もある。また PBL-COIL では、「企業の立場になり新しいものを作り出す」という学生それぞれの独創的な発想に焦点が置かれたため、このような課題に慣れていなかった学生にとって、至難の業だったのではないかと考える。ただ、フィードバックの中には難しかったがやりがいがあったという声も見られ、就職前にこのような経験ができたのはよかったのではないだろうか。全体として、日本の学生と交流することで新しい視点を理解する機会になり有意義だったと考えている学生が多数を占めた。

COIL の教員への影響としては、カリキュラムを組むにあたり異なる意見を聞くことができたこと、そしてどのような情報をいつ提示するのかもう少し詳しく吟味する必要があったこと、また COIL の成績がコース全体の成績にどのように影響を与えるのかの違いによる学生の貢献度の差異など、気づきや考えさせられることが多々あった。また珍しい 3 大学間での COIL を経験し、学生同士の関係性を見る良い機会にもなった。今後の展開として、経済的また専攻学科との調整等により留学できない多くの学生に対して異文化交流の機会を作るため、引き続き COIL を取り入れた授業を行う予定にしている。



オンラインによる顔合わせのセッション

(4/9/2022)



PBL-COIL : コラボした日本企業の米国関連会社スタッフによるオンライン講義 (9/27/2022)

UNGでのCOILの取り組み

University of North Georgia
Department of Modern and Classical Languages
Associate Professor
西尾 知恵

University of North Georgia（ノースジョージア大学、以下UNG）ではこれまでに南山大学と約20のCOILプロジェクトを行ってきた。現在では、日本語プログラムに限らず、東アジア研究プログラムの教員が、人類学、メディア研究、国際関係、アートなどの様々なコースでCOILを取り入れている。UNGで日本語や日本について学ぶなら必ずと言っていいほどCOILプロジェクトを行うクラスに当たるほどだ。

特にPBLとモビリティ型ベーシックCOILプロジェクトは学習効果が高く、学生からの人気もある。これまでのPBLでは「日米のワークカルチャー」や「女性のエンパワーメント」など、日米の社会構造を深掘りするトピックについて協働学習してきた。通常の講義型授業に比べ、実際にCOILパートナーの経験や意見を踏まえて多面的に理解を深めることで、さらに論理的思考力が養われる。また、モビリティ型ベーシックCOILでは、①UNGへの短期留学プログラムと②南山への短期留学プログラムがあり、それぞれオンライン交流期間を経て、留学中に対面で学習を深めていく。実際に留学する前に交流することで、海外経験が少ない学習者も安心してプログラムに参加できるのが特徴だ。



オンライン交流の様子



米国マキタへの訪問



UNGでの短期留学プログラム



南山での短期留学プログラム

NU-COIL プログラムが掲げる3つの能力 (Multicultural Skills, Interdisciplinary Skills, and Problem Detection & Resolution Skills) は南山生が3層の COIL 型授業を通じて段階的に習得していくものであるが、パートナーとして COIL に取り組んだ UNG 生もグローバルな協働能力を養うことができた。特に、異なるバックグラウンドの相手と向き合っテディスカッションをすることから始め、そこから共通の成果物のため同じ方向を向いて協働学習を進めていくことで、グローバル化が進む社会に必要な力が実践的に養われた。

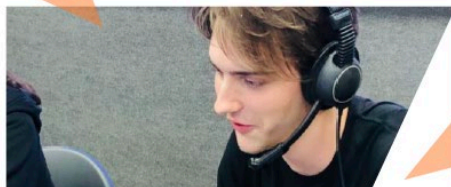
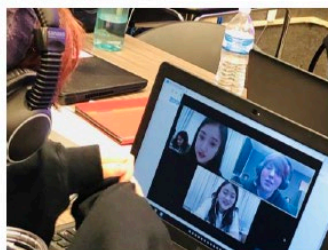
過去10年以上バーチャルエクスチェンジをクラスに取り入れてきたが、起こりうる問題 (例: 言語レベル・意欲等の不釣り合いや、文化差異による誤解や行き違い等) のほとんどはプロジェクトデザインを見直すことで改善される。教員が学生の特性をよく知り、計画を立て、発生した問題に的確かつ素早く対処していくことが重要となる。捉え方によっては、学生にとって交流上の問題は異文化コミュニケーションでは避けては通れないもので、解決していくこと自体が実社会で起こりうる問題に対する学習機会にもなるが、教員としてはあくまでもよりよい学習環境を作り上げていくために試行錯誤を重ねていくしかない。

COIL にテンプレートはなく、目的や状況に応じて様々な形態で行われる。自由度が高く、学習目標到達の手段の一つとして、UNG の教員の間でも高く評価されてきている。特にパンデミック下でモビリティが制限され、オンライン学習が珍しいものではなくなった昨今、新たに COIL を始める抵抗感も少なくなっているようだ。UNG では今後も COIL を通じてグローバルな人材を育成していく。



I haven't ever had the opportunity to speak with people from another country this extensively. Many of the things we discussed, I already knew a little about through my own research, it was very different to hear about their personal experiences and opinions.

The project allowed me to speak to people my age in our target languages. It was a great way to practice and learn about culture.



We learned from each other a lot. We had a difference of opinion on some social topics, which gave me a new perspective and made me think about them even more. Working on the final product together prepared me well for a diverse world after college.



学生からのフィードバック (ベーシック COIL)

V. 学生による学びの報告

留学経験とキャリア形成

南山大学外国語学部英米学科 4年

市村 朋也

2021年8月より、ニューヨーク州にあるQC（クイーンズカレッジ）で約1年間の交換留学を経験しました。多様性に富んだ地域で、様々な人種、文化、民族を背景と持つ人と関わりたいという思いから、QCでの留学を希望していました。今振り返ってみても、“人種のるつぼ”と呼ばれる通り、本当に多様性の富んでいる地域で、大変な思いをすることも多かったですが、色々な体験をすることができ、挑戦して良かったと心の底から思える経験をすることができました。

その中でも、QCでの留学経験、COILプログラムを通じたインターンシップは、就職活動を留学中にも行っていた私にとって、自分自身の将来のキャリアを考える上で大きなきっかけになったと思っています。留学を経験する前は、何となく海外出張をしながら大学でも勉強してきた英語を使って仕事をしてみたいと考えていました。しかし、留学が始まって自分の語学力の足りない点や、異なる文化に適応する難しさを実際に体感する中で、正直自分には海外に仕事をしに行くということのハードルの高さから、将来どういったことに携わりたいのかということを見失っていた時期もありました。就職活動に行き詰まりを感じていた頃、日常生活で時々見かけた日本の商品から見慣れたものに対する安心感や、友人に商品や文化を紹介したときに、前向きな言葉をもらったりする中で、日本よさを商品や文化を通じて世界中の人に知ってもらえることができるということを実感しました。また、COILプログラムの一環として、東京新聞/中日新聞ニューヨーク支局でインターンの経験をすることができました。その中で、実際に海外駐在として働く社員の方のお話を聞くことができ、日本と世界の架け橋となり、国際社会の中で働きたいということが非常に明確になりました。

留學生活で再認識した日本の魅力やそれを新たに知ってもらえる喜びを初めて知り、インターンを通じて国際社会で自分の付加価値を付けながら活躍するということの苦勞とやりがいを知りました。これらの経験から、自分自身のキャリアの中で、日本の魅力を世界に伝える仕事に就きたいという思いが固まり、帰国後の就職活動でもブレない軸を持てるようになりました。大学卒業後は、留学で培ったコミュニケーション能力や、異文化を理解する力を活かして、日本の魅力を国際社会に広める架け橋になりたいと思っています。



東京新聞/中日新聞 NY 支局でのインターン

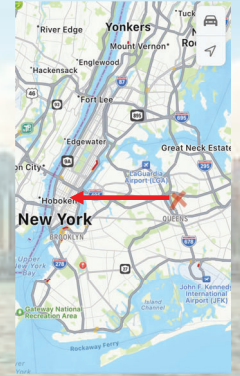


QC キャンパスの様子

NU-COIL総括シンポジウム

市村朋也

Queens College



Queens Collegeでの経験

- 人種、宗教、民族
- 世界中の交友関係
- スピード感
- 政治に対する意識



留学経験

- コミュニケーション方法
- 価値観の受容性
- 人の内面をより見る
- 行動力がついた
- 諦めない力



日本とアメリカ

JP

- 計画性
- 相手に配慮する
- 伝統的

- 単一民族国家
- 英語教育

US

- 柔軟性
- 自分を大切にする
- 革新的

- 察する力
- 友人との距離感

COIL型授業 Political Science(政治学)

- 連携校 : Purdue University Northwest

• TOPIC :

- コロナ禍での生活環境の様子、変化
- コロナ禍における東京オリンピックの開催について

PBL COIL (留学後)

TOPIC: プラザの製品・サービスが貢献できる社会課題を特定し社会課題解決と事業成長を同時に実現できるアイデアを提案してください

- ・連携校: University of Maryland, Baltimore Country
- ・自分のグループの提案
鹿菜野菜、果物から植物性インクを作り服の染料にして、販売
- ・他のグループの提案
衣類用プリンターで古着を再デザインして再利用
在日外国人向けのミシン教室を通じて日本語教育

留学前COIL型授業, 留学後PBL COILの経験

COIL型授業

- ・授業の中で海外の学生と関わる初めての機会だった
- ・言葉の壁
- ・伝えようとする姿勢
- ・コミュニケーション方法

PBL COIL (留学後)

- ・自分がリーダーシップをとる

最後に

留学経験

- ・異なったコミュニケーション方法
- ・相手を理解しようとする
(曖昧なままにしない)
- ・自己開示力
- ・行動力
- ・諦めない力

COIL型授業

- ・企画する
- ・交渉する
- ・相手の商習慣を理解する

学内での国際交流から学んだこと

南山大学外国語学部英米学科 3年

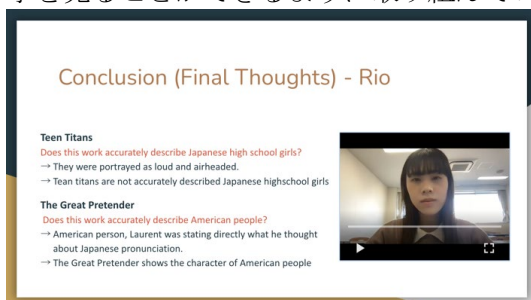
堀町 莉音

私は、ベーシック COIL、アカデミック COIL、PBL COIL と段階的に COIL 型授業を履修してきました。ベーシック COIL では、中国の学生とオンライン上で交流をしました。この COIL での最終発表はグループプレゼンテーションで、将来の働き方について日本と中国で比較しました。実際に自分たちでアンケート調査を行い、その結果をもとに日本と中国で比較をし、プレゼンテーションを協力して完成させることができました。交流や発表の準備をする中で、コミュニケーションを取ることの難しさを感じました。私も中国の学生もどちらも英語を母国語としていなかったため、オンライン上で顔を合わせて交流した際には苦労しました。しかし母国語が違っていても英語を使うことで、自分の意見を伝えることや相手の話を聞いて交流ができるということを知り、とても貴重な経験になりました。

アカデミック COIL の授業は2回受講し、どちらもアメリカの学生とのオンライン交流でした。日本の食文化についてのテーマと、日本とアメリカの映画を比較するテーマで、ビデオプレゼンテーションを作成しました。ベーシック COIL よりもさらに深く限定された文化がテーマであったため、プロジェクト内容自体にも難しさを感じました。しかし約2ヶ月間の交流を通して、アメリカの学生と共同で1つの発表を完成させたことが、自分の中で大きな達成感になりました。アメリカの文化を知るだけでなく、日本についてもより深く考えるきっかけになりました。大学での授業を超えて、海外の学生とオンラインで交流ができ、同じプロジェクトを進めていくという経験ができて良かったです。

PBL COIL では障がい者のソーシャルインクルージョンが授業のテーマで、連携組織の担当者から講義をお聞きしたことや、中部国際空港へ見学に行きユニバーサルデザインを勉強したことが印象に残っています。成果物として駅から大学までのオーディオマップを作成しました。PBL COIL でも同様にアメリカの学生との交流がありました。メッセージのやり取りやオンライン上でディスカッションをして、それぞれの国でのバリアフリーや障がい者という視点から意見交換をしました。専門的な内容の知識や語彙も必要になったため、英語で伝えて理解することに苦労しましたが、アメリカの大学でのバリアフリーについても知ることができました。日本の制度や設備だけではなく、国際的な視野を持ちながらソーシャルインクルージョンについて考えることができ、オーディオマップの作成にも生かすことができました。

COIL 型授業を受講して、普段の授業では学ぶことが少ないテーマについて、実践的に体験して学ぶことができました。また海外の学生との意見交換を通して、自分の考え方が大きく広がりました。COIL 型授業から学んだように、これから多くの人との関わりを大切にして、常に学ぶ姿勢を意識し、多角的に物事を見ることができるように取り組んでいきたいです。



アカデミック COIL で使用したスライド



PBL COIL で作成したオーディオマップ

NU-COIL 総括シンポジウム

外国語学部 英米学科 3年 堀町 莉音

2022年12月21日(水)

目次

1. COIL型授業

- ベーシックCOIL(2020年度)
- アカデミックCOIL(2022年度)
- PBL COIL(2022年度)

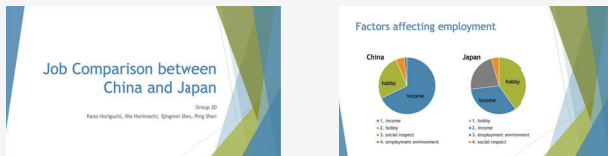
1. 学内での国際交流

- Global Chit-Chat
- 多文化交流ラウンジStella

1. まとめ

1. COIL型授業 ■ ベーシックCOIL ■

英語IIIオーラルコミュニケーション
(2020年度Q3 / OTTOSON, Kevin 先生)
天津師範大学 (中国)



1. COIL型授業 ■ ベーシックCOIL ■

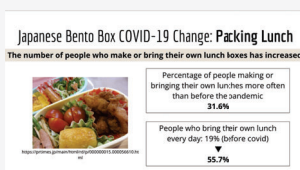


- オンライン上での交流
- ビデオを送り合った交流
- グループプレゼンテーション
- アンケート調査の実施

学んだこと
母国語が違っていても、英語を使うことで、交流ができた

1. COIL型授業 ■ アカデミックCOIL ■

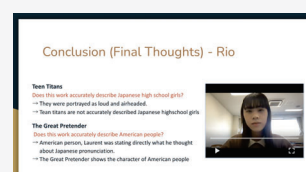
演習I (2022年度Q1 / 今井 隆夫 先生)
University of Maryland, Baltimore County (アメリカ)



- UMBC 1人、南山生2人
- 日本食について英語でプレゼン
- ビデオクリップの作成
- 週に1回オンライン上で交流

1. COIL型授業 ■ アカデミックCOIL ■

異文化コミュニケーション (2022年度Q3 / 花木 亨 先生)
University of Maryland, Baltimore County (アメリカ)



- UMBC 2人、南山生2人
- 映画の描写を比較 (日本の映画とアメリカの映画)
- ビデオクリップの作成
- チャット上でメッセージを送り合った交流

1. COIL型授業 ■ アカデミックCOIL ■

演習I (2022年度Q1 / 今井 隆夫 先生)

University of Maryland, Baltimore County (アメリカ)

異文化コミュニケーション(2022年度Q3 / 花木 亨 先生)

University of Maryland, Baltimore County (アメリカ)

学んだこと

- 海外の学生と共同でプロジェクトを完成させた達成感
- アメリカの文化だけでなく、日本の文化についても深く考えることができた

1. COIL型授業 ■ PBL COIL ■

国際産官学連携PBL B (2022年度Q3 / 藤掛 千絵 先生)

University of Maryland, Baltimore County (アメリカ)



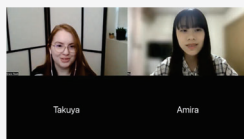
中部国際空港の見学

- 連携組織の担当者からの説明
- 空港のユニバーサルデザインやバリアフリーを見学

1. COIL型授業 ■ PBL COIL ■



- 駅から大学までのオーディオマップを作成
- フィールドワークの実施
駅から大学まで車椅子の体験



アメリカ (UMBC) の学生との交流

- UMBC 4人、南山生2人
- 週に1回オンライン上で交流
- チャットを使った意見交換

1. COIL型授業 ■ PBL COIL ■

国際産官学連携PBL B (2022年度Q3 / 藤掛 千絵 先生)

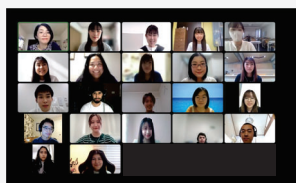
University of Maryland, Baltimore County (アメリカ)

学んだこと

- 日本だけでなく、アメリカでのバリアフリーや障がい者との関わり方について知ることができた
- 当事者からの講義や授業でのフィールドワークを通して実践的に学ぶことができた
- グループワークを通して、福祉というテーマについて考えを深めることができた

2. 学内での国際交流 ■ Global Chit-Chat ■

2022年4月～ ファシリテーター



海外の学生と南山生が英語で交流

- 当日のオンライン交流の進行
- 学生同士の会話のテーマやトピックを考える
- アクティビティやクイズの企画

2. 学内での国際交流 ■ Stella ■

2022年3月～ 多文化交流ラウンジStella NIA (学生TA)



- ラウンジで学生とのコミュニケーション
- イベントの企画や準備、運営

大学内で留学生と交流ができ国際交流を楽しめる

3. まとめ

COILを履修して良かったこと

- 海外の学生との交流により、学びを共有できた
- 授業では扱わない内容について学ぶことができた
- 連携組織の担当者からの講義やフィールドワークを通して深く考えることができた

3. まとめ

COIL型授業や大学内での国際交流を通して学んだ
専門的な知識や国際交流



将来教員になるという目標に向かって、学んだことを活かして、
様々な面から生徒に教えられるようにしたい

COIL と私の留学経験について

南山大学外国語学部英米学科 3年

佐藤 祐衣

私は、2021年春に約1か月間、ノースジョージア大学（以下 UNG）の学生と毎週交流をし、最終成果物として一つの動画を作成するといった内容のオンライン短期留学プログラムに参加した後、2021年8月から2022年5月まで、COIL 提携校であるアリゾナ州立大学（以下 ASU）で交換留学を経験しました。そして、交換留学を終え帰国した後は、PBLCOIL C と D2 を履修しました。今回は、上記の短期/交換留学で得た学びと、その学びを PBLCOIL の授業でどう活かしたかに焦点を当ててお話しします。

オンライン短期留学プログラムで得た学びの一つは、日本文化を知らない人の目線を取り入れて生活することの重要性です。UNG の学生と交流する中で、日本の文化に関する質問を投げかけられた際、自分にとって当たり前のことであり、深く考えた事がなかったため、上手に答えられず、もどかしい思いを経験しました。そこで、UNG の学生含むより多くの外国人に日本の魅力を伝えるために、また、日本を客観的に見つめて自国に誇りを持つために、客観的な視野を身に着けることが大切であると気が付きました。

ASU での交換留学で得た学びの一つは、殻を破って何事にも挑戦することの重要性です。留学が決まった当初は「何にでも挑戦する！」と意気込んでいた私ですが、いざ留学に行ってみると心細くなり、慣れない土地で積極的に行動を起こせない自分がいました。しかし、そんな自分に嫌気がさし、勇気を出して一人で学外の清掃ボランティアに参加してみると、思いがけない出会いや新たな発見がありました。そこから、未知の世界に飛び込むことは楽しいことだと捉えられるようになりました。

上記2つの学びを発揮したのが PBLCOIL 授業です。まず、PBLCOIL の授業を履修すること自体が私にとって「挑戦」でした。その授業を取ることは必須ではないにも関わらず、「やったことのないことに挑戦したい！」「成長したい！」という意欲的な姿勢で、一つの学期に2種類の COIL 授業を並行して履修しました。また、COIL 授業は、海外の学生と日本人学生のコラボレーションが肝であることから、日本人として意見を述べることはもちろん、日本の現状や日本の特性を伝える必要がありました。そこで、意識して客観的に日本の事象を捉えてきた経験を活かし、海外の学生に自信を持って自国を説明することに成功し、学生の興味・関心に応えることができました。

私は、本学の持つ COIL 制度を惜しみなく活用し、国際交流を存分に楽しむことができました。コロナ禍でありながら、このような貴重な経験をさせていただけたことには本当に感謝しています。今年度で大学の世界展開力強化事業の補助期間は終了するとのことですが、今後も何らかの形で学生が国際交流を楽しみ、充実した大学生活となることを切に願っています。



UNG の学生とのミーティングにて



グランドキャニオンにて

COILと私の留学経験について

外国語学部英米学科3年 佐藤祐衣



自己紹介

外国語学部英米学科3年

佐藤 祐衣

- 種類: 交換留学 (学部留学)
- 期間: 2021年8月~2022年5月
- 大学: Arizona State University (米国)



目次



1. オンライン短期留学プログラムでの学び
2. 長期交換留学での学び
3. 留学経験が現在の生活に与える影響

オンライン短期留学プログラム



学び①

- UNGの学生は日本文化に興味津々
- 自分にとって当たり前なことを詳しく聞かれたとき上手く答えられなかった



→ 日本文化の素晴らしさを伝えたい
日本文化を客観的に見つめ直したい



日本文化を知らない人の視線を意識的に取り入れるべき

オンライン短期留学プログラム



学び②

- 慣れない英語の会話についていけなかった
- 盛り上がっている会話の流れを崩すのが怖かった



⇨ UNGの学生は私が会話に入りたくないと感じ取っていた



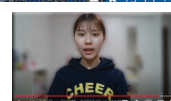
積極的に話に入ろうとする態度が仲良くなるために必要不可欠

オンライン短期留学プログラム

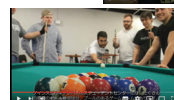


学び③

- 母国語の異なる学生とオンラインで出会い、オンラインでプロジェクトを進めることに不安を感じていた



⇨ UNGの学生は非常に「学び」に貪欲で、積極的に協力しようとしてくれた



「学びたい」気持ちが一致すれば、国籍も年齢も性別も関係ない

Arizona State Universityでの留学

学び①

- ・日本人一人で行動することに不安を感じていた
- ・知らない環境に飛び込むことが怖かった



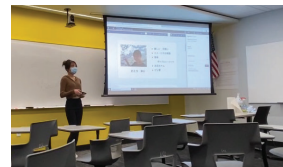
⇒勇気を出して行動してみると、
思いがけない出会いや学びがあった

殻を破って何事も挑戦すべき

Arizona State Universityでの留学

学び②

- ・タスクが多い
- 例)1週間に30ページ以上のテキストを読む
- 1つの授業で毎月プレゼンをする
- 字幕なし映画を観ながらワークシート記入
- +遊びも楽しみたい!



タイムマネジメントの重要性

Arizona State Universityでの留学

学び③

- ・イレギュラーなことに一人に対応
- 例)【留学初日】フライトが10回以上遅延
- 配車アプリ使用不可
- 【留学中】パソコンのウイルス感染
- 交通手段がなく一時帰宅不可



物事を冷静に判断する力

留学の経験が現在の生活に与える影響

国際交流:

PBLCOIL授業

- ・自ら物事を学ぼうとする姿勢を持てるようになった
- ・相手を理解し受け入れられるようになった
- ・困難を乗り越えられるようになった



NaSIPでの活動

- ・留学経験で本学生をサポートすることに挑戦している
- ・アクシデントに冷静に対応できるようになった



留学の経験が現在の生活に与える影響

その他:

部活動

- ・練習メニューを時間で管理できるようになった
- ・難易度の高い技に果敢に挑戦するようになった
- ・アクシデントが起きてても先輩に指示出せるようになった



就職活動

- ・自分を客観視して自己分析できるようになった
- ・物怖じせず積極的に挑戦できるようになった



My Experience with the COIL Program at Nanzan University

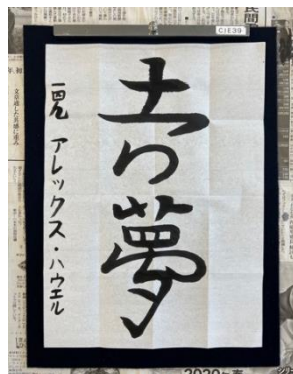
University of North Georgia
Junior, Department of East Asian Studies
Alexander HOWELL

My name is Alex Howell, and I'm currently in my third year of study at the University of North Georgia. This past semester, thanks to the COIL Program, I had the opportunity to study abroad Japan, and I'd like to talk about my experience.

First, I'll speak on the academic experience I had at Nanzan University. I was enrolled in third level of the Intensive Japanese Program (IJP), where I took one intense language course and three other content courses related to Japan (Japanese Calligraphy, Japanese Cinema, and Japanese Society). Through these courses and the amazing professors that taught them, my understanding of Japanese language, culture, and way of life all increased tenfold, and I'd like to think that the same is true for my fellow exchange student classmates.

Next, I'll talk about my living situation during my time in Japan. Normally, students who come to Japan for study tend to lean towards homestays, where they can experience what it's like to live with a Japanese family. However, I chose a different path and opted for something that Nanzan had just introduced: Janssen International Residence. There, I shared a residence with both Japanese students and other international students. Before going there, I was told by my peers that my Japanese wouldn't improve since I'd be surrounded by English speakers, but I found that to be completely untrue. The Japanese students I lived with were great people, and though I didn't live with a Japanese mother and father, I found a sense of family in the form of brotherhood. Nothing that I say can effectively communicate how important that experience was to me, but I'll forever cherish the late-night trips to *konbini* and *onsen* with my roommates, and all the other seemingly normal day-today activities we did together.

Thanks to the COIL Program offered by Nanzan University, I both grew as a person and cultivated my understanding of Japan from an inside perspective as an international student. Though I've already come back to the United States to finish my degree, I feel that my future lies in Japan and will continue to use what I learned from COIL and Nanzan to attain it.



One of my works from *shodou* class



Me with my roommates from Janssen

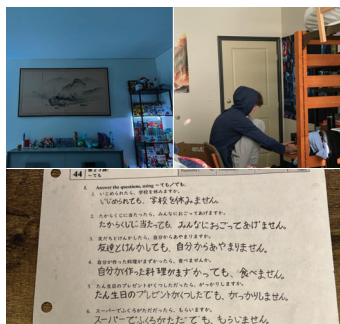
COILと留学の経験

アレックス・ハウエル

自己紹介

僕はアレクサンダ・ハウエルですが、アレックスとも言います。北ジョージア大学の3年生ですが、今は南山大学に留学しています。専攻はアジア研究で、日本語を勉強しています。僕の将来の夢は外交官になることです。

今から、僕のCOILと南山での経験を紹介したいと思います。



COILに参加する前

- COILに参加する前、私の日本語に対する自信はほとんどありませんでした。2年間勉強してき... 同年代の日本人と交流する機会がありませんでした。
- その上、言語能力だけでなく、日本の社会・文化に対する理解も不足していました。

First COIL Event

- 初めてCOILのイベントに参加したとき、私は何をしたらいいのか分かりませんでした。初対面の日本人学生たちとズームコールで、自信のない言語で日本の社会問題について話していたのです。しかし、すべてがうまくいきました。その理由をお話します。

First COIL Event pt. 2

- 例えば、私のグループでは、まさよしという日本人の学生に出会い、私が日本語で苦勞しているところを助けてもらい、友達になりました。
- COILのイベントで他の交換留学生に出会うことができました
- 友達を作る以外には、日本の現代社会の問題について学ぶことができました。特に、障害者に対して住みやすい社会を作っている事に感心しました。

COIL Class Experience pt. 1

- COILのイベントを終えて、もっとプログラムに関わりたいと思い、日本のCOIL生ともっと交流するために、私の大学が開講している授業を受講しました。今回の授業は、南山大学では英語の授業として扱われていましたが、私の大学では日本社会言語学として扱われていました。
- このコースでは、日本人学生のグループを指定され、一緒に勉強しました。私はそのグループの学生たちから、日本の方言や話し方のマナーについて学んでもらい、学生たちの英作文やスピーキングを手伝いました。



COIL Class Experience pt. 2

- COILは私にとってただの授業ではありませんでした。COILの授業を通して様々な人に会い、授業外では一緒に日本の良さを見に出かけたりしました。

Studying at Nanzan pt. 1

南山に入学する前には、地元や自分の生まれた国・アメリカから出たことがありませんでした。日本に来て様々な文化に出会い、カルチャーショックも経験しました。中でも、建前という日本独自の言葉の文化には大変驚きました。また、日本の交流ルールや地下鉄の乗り方、食生活に順応するのも大変でした。ただ、COILのおかげでかけがえのない友人に出会えたり、日本での生活が非常に楽になりました。



Studying at Nanzan pt. 2



- 南山に来てから、私は日本の学生たちと今までは違う様々な機会を得ました。大阪から東京までたくさん旅行し、多くの親しい日本人の友達と過ごし、一時はバレーボールの部活にも参加した。
- しかし、最も重要なことは、南山とCOILプログラムのおかげで、私の日本語と日本文化に対する理解が10倍増したことです。



南山とCOILの友達

Closing Remarks

- COILの授業や南山大学に入学できたことを大変うれしく思います。日本で出来た友人や先生のおかげで、日本という国を自分の目で確かめることができました。

My COIL Experience

Sage Druch

About me

Sage Druch

Graduated from ASU this fall with a Bachelors in Japanese



Beginning April, I will be pursuing a degree in Cognitive Linguistics from Tohoku University through the MEXT scholarship

My COIL experiences

1. June of 2021 with Mei Kikuta
Shorter COIL project about how cultures differ.
Talked over zoom for two sessions, and then wrote a brief report.
1. Fall Semester of 2022 with Nanai Kamiya and Orié Tani
Longer COIL project as part of a Business Japanese class.
Designed a travel itinerary for American high school students travelling to Japan

COIL-mate Project

First project that I did in 2020, prior to an online study abroad.

I wasn't able to study abroad, but on account of that I was able to meet Mei when she eventually came to America.

Afterwards we, along with two of our friends, travelled around northern Arizona.



Grand Canyon

We got to visit the largest canyon in the world.



Sedona

We also saw Sedona, notable for its iconic and unique scenery.



Montezuma's Well

This is a limestone sinkhole with rich archaeological and biological interest.

What I gained

- Opportunity to interact with Japanese students before they come to America, which leads into the opportunity to continue this into in-person experiences.
- I felt it was fun experience which would also be helpful in preparing to study abroad.

Business Japanese COIL project

- Project was exclusively in Japanese.
- Designing a travel plan for highschool students coming to Aichi Prefecture
- Making surveys to gain feedback
- Using feedback to make a tailored travel plan

TIME Travel
through
Aichi's History

Yayoi period

Experience net fishing followed by a barbecue!
Afterwards, take the ferry to Himakajima and stay the night on an island occupied since prehistoric times!

Edo Period

See Nagoya Castle and Inuyama Castle!
Also join a ninja school and learn ninjutsu!

Meiji Period

Spend the morning at a coffee shop, then go to Meijimura, a Meiji theme-park!
Afterwards, go to Noritake park and explore Meieki Station.

Modernity

Experience Japan! Explore Nagoya to go to a cafe, find your favorite anime merchandise, see Chubu TV tower, Oasis 21, or anything else!

What I learned

- For people entering into professional positions requiring the use of Japanese and interacting with Japanese nationals, the COIL project provided direct experience with solving multi-step problems.
- For those not entering into that sort of environment, engaging in the process itself is still a valuable experience from the perspective of learning Japanese, and learning how to cooperate while using one's non-native language.
- The focus on conversation and interaction in the first COIL experience made for the opportunity for human connection, which is otherwise often difficult online.
- In the case of the Business Japanese COIL Project, the aim of the project was much more on gaining experience working on a goal, rather than the social aspect, but to this end it was also very successful.

THANK YOU

VI. 総括シンポジウム



南山大学

南山大学国際センター主催「大学の世界展開力強化事業（米国）総括シンポジウム」
日米をつなぐ NU⁴-COIL² ～地域に根ざしたテイラーメイド型教育プログラム～

日時：12月21日（水）9:00～12:30

場所：南山大学 Q棟5階会議室/オンライン（Zoom ウェビナー）

【第1部】	
9:00-9:05	開会挨拶 -ロバート・キサラ 南山大学学長
9:05-9:25	プログラム全体の成果報告 -星野昌裕 南山大学副学長(グローバル化推進担当)
9:30-10:40	パネルディスカッション：今後の展望 「COIL 型教育を活用した新たな教育的取組や展開、将来の連携の在り方」 -モデレーター：山岸敬和 南山大学国際センター長 -米国連携校コーディネーター教員 ・ Arizona State University : Tomoko Shimomura, Principal Lecturer in Japanese ・ Dickinson College : Akiko Meguro, Senior Lecturer of Japanese ・ Georgetown University : Yoshiko Mori, Associate Professor and Director of the Japanese Language Program in the Department of East Asian Languages and Cultures ・ Northern Kentucky University : Yasue Kuwahara, Professor, School of Media and Communication ・ Queens College, the City University of New York : Mari Fujimoto, Director of Japanese Studies ・ University of Maryland, Baltimore County : Tomoko Hoogenboom, Senior Lecturer/Japanese Area Coordinator ・ University of North Georgia : Tomoe Nishio, Associate Professor
10:40-10:55	質疑応答 （会場参加者/Webinar 視聴者からの Q&A）
10:55-11:00	第一部まとめ -山岸敬和 南山大学国際センター長
11:00-11:20	休憩
【第2部】	
11:20-12:10	参加学生による学びの報告 -モデレーター：藤掛千絵 南山大学国際センター特別任用講師 ・ 南山生 3名 (COIL 履修者、米国連携校への長期派遣学生、短期プログラム参加学生) ・ 米国学生 2名 (2022 秋南山大学交換留学生、元南山大学交換留学生)
12:10-12:20	質疑応答 （会場参加者/Webinar 視聴者からの Q&A）
12:20-	閉会挨拶 -星野昌裕 南山大学副学長(グローバル化推進担当)

総合司会：山岸敬和 南山大学国際センター長



Nanzan University Collaborative Online International Learning: International Symposium NU⁴-COIL² Japan and the U.S. ~A Regionally Deep-Rooted Tailor-Made Education Program~

Date and Time : Wednesday, December 21st 9:00~12:30

Venue : Nanzan University Building Q 5thFloor / Online (Zoom Webinar)

Session 1	
9:00-9:05	Welcome Remarks Robert Kisala, President, Nanzan University
9:05-9:25	Program Overview and Accomplishments of NU-COIL Masahiro Hoshino, Vice President for Global Affairs, Nanzan University
9:30-10:40	Panel Discussions : Future Outlook “New educational initiatives and developments utilizing COIL-type education, and future collaboration” -Moderator : Takakazu Yamagishi, Director, Center for International Affairs, Nanzan University -Panelists <ul style="list-style-type: none"> · Arizona State University : Tomoko Shimomura, Principal Lecturer in Japanese · Dickinson College : Akiko Meguro, Senior Lecturer of Japanese · Georgetown University : Yoshiko Mori, Associate Professor and Director of the Japanese Language Program in the Department of East Asian Languages and Cultures · Northern Kentucky University : Yasue Kuwahara, Professor, School of Media and Communication · Queens College, the City University of New York : Mari Fujimoto, Director of Japanese Studies · University of Maryland, Baltimore County : Tomoko Hoogenboom, Senior Lecturer/Japanese Area Coordinator · University of North Georgia : Tomoe Nishio, Associate Professor
10:40-10:55	Q&A
10:55-11:00	Comments for Session 1 - Takakazu Yamagishi, Director, Center for International Affairs, Nanzan University
11:00-11:20	Brake Time
Session 2	
11:20-12:10	Sharing of Study Abroad Experience by NU-COIL Participants -Moderator : Chie Fujikake, Specially Appointed Instructor, Nanzan University <ul style="list-style-type: none"> · 3 Students(Nanzan University) · 2 Students(Exchange Students ,Studied at Nanzan University)
12:10-12:20	Q&A
12:20-	Closing Remarks - Masahiro Hoshino, Vice President for Global Affairs, Nanzan University

Takakazu Yamagishi, Director of Center for International Affairs, Nanzan University, will serve as the overall MC of the symposium



キサラ学長による開会挨拶



星野副学長によるプログラム全体の成果報告



米国連携校コーディネーター教員によるパネルディスカッション



COIL 型授業に参加した学生による学びの報告

Ⅶ. 総括

国際教育のさらなる進化に向けて

南山大学国際センター長
山岸敬和

文部科学省「大学の世界展開力強化事業」において採択された「日米をつなぐ NU⁴-COIL² ～地域に根ざしたテイラーメイド型教育プログラム～」が、5年間の事業期間を終えた。NU-COILに参加した教員や学生コメントを見ても分かるように、この事業を実施したことの効果は多大であった。

「オンライン国際交流」というと、多くの学生は「楽しい」というイメージを持つ。しかし、共同プロジェクトを行い、それに対する評価が成績に反映される COIL 型授業では、言語、時差、文化等が原因となったミスコミュニケーションが頻繁に起きる。授業前は楽しさを期待していた学生は、COIL 型授業でプロジェクトを進める中で、困惑、ストレス、時には憤りをも経験する。しかし、まさにこれが COIL 型授業の醍醐味であり、これらをできるだけ多く経験し克服することが、これから必要とされる「多文化共生力」「学際的国際力」「問題発見・解決力」を身につけることにつながるのである。

事業期間中にコロナ禍に直面し、海外渡航が停止された中で、COIL 型授業はそれに代わるものとして注目されることになった。実際に外国に渡航して長期間滞在する中で経験することは学生の大学での学びや、それからの人生に大きなインパクトを与えることは否定できない。しかし、ある意味で COIL 型授業は、その取り組み方によっては留学で得られる経験を超えるものであると言える。一年間交換留学で海外大学に滞在しても、地元の学生と一緒に濃密な共同プロジェクトをやるような経験は多くはない。COIL 型授業に真剣に取り組むことで、学生は留学以上の学びの機会を提供する可能性があるのである。

また本事業は、学生のみならず教員も事務職員にとっても学びが多く、貴重な FD・SD の機会を提供した。教員にとっては、海外の教員と COIL 科目を実施することで、自らの教育手法、授業運営、さらに教育の効果測定を客観的に見直す機会になった。事務職員にとってみると、自然にはなかなか拡大しない COIL 型授業を増加させるために、そして COIL 型授業をより良い学びとするために、どのような事務サポートが必要かを教員と一緒に考えるきっかけになった。本事業は、学生、教員、事務職員にとって、国際教育の新たな展開を思考するため、それを実施するための機会になったのである。

ようやくコロナ禍の出口が見え始めたところである。コロナ禍の副産物としてオンライン教育が発展した。今後はオンライン教育を大学の学びにどのように有機的に組み入れていくのかが問われている。コロナ禍で行われたオンライン教育の対面授業の代替としての役割を超えないものが少なくない。しかし COIL 型授業はそのようなものとは質的に大きく異なり、その教育的効果も高い。ポスト・コロナの国際教育の新たな展開の中で、COIL 型授業は重要な地位を占めていると考えられる。

南山大学では NU-COIL の自走化がすでに機関決定されている。事業で採用した教員枠を継続するとともに、引き続き COIL 型教育を全学的に発展させていく予定である。カトリック連携の中で国際的な COIL 型授業の拡大のために貢献する計画も進行中である。本学のみならず NU⁴ の 4 つ目の「U」である、「Universal」な広がりを見据え、今後も南山大学の COIL 事業、NU-COIL を進めていきたい。



南山大学

令和5年3月発行

Published in March 2023

南山大学国際センター

Center for International Affairs, Nanzan University